

---

# 騎兵な彼女と転生者な僕

空山

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

騎兵な彼女と転生者な僕

### 【Nコード】

N1076W

### 【作者名】

空山

### 【あらすじ】

戦うとか無理です、だからサーヴァント下さい。そうして呼び出したのは、バイクに乗った騎士王！？注意！この作品はリリカルなのはと、FATE/ZEROのクロスオーバーです。

## 第一話 人生の最後は突然に

「・・・はあ、転生ですか？」

「はい、そうです」

眼前の、恐ろしく顔色の悪い人物にそう告げられる。・・・って、転生！！何で！？もしかして僕死んだの！？子供助ける為にトラップの前に出た覚えとか有りませんよ！？混乱する僕に気付いたのか、顔色の悪い人－この流れだと多分神様だと思う－が、僕の想像を裏付ける様に言った。

「そうです。そうです。貴方はお亡くなりになりました。因みに享年十六歳、死因は、『隣の部屋でガス自殺を図った人の巻き添え』です」

「・・・巻き添え、ですか？」

「ご希望なら、詳細な説明をしますが？」

そう聞かれたが、正直自分の死んだ瞬間とか知りたく無いので、丁重にお断りした。はあ、そうか僕死んじゃったんだ。父さん、母さん、ペットのはやて－因みに狸。実家はかなりの田舎なので、普通に狸がいる－先立つ不幸をお許し下さい。それにしても転生か。うん全く持って興味無いです。アレだよね？ネットとかで見たSSとかのやつだよね？無理無理戦うとか、僕は正真正銘の一般人

だし、例えどんなチートを買ってもいざその場に立つたらビビッて何も出来ないと思う。

「まあ、それが普通の反応ですよ。最近は何も転生の話をする、異常な程のハイテンションに成る人が多くて、私も困ってるんですよ」

溜息と共に、そう語った神様？如何やら、顔色が悪いのは単純に疲れているかららしい。あれ？さっきから僕の考えてる事が読まれてる？

「神様ですから」

人の心位読めないと、ボーナスに響くんですよ。・・・神様もボーナスとか有るんだ。死んだ事とか、転生の事も驚いたけどこれはこれで驚愕の事実ってやつだね。きっと誰も信じないだろうけど。

「さて、それでは転生についてのお話をしましょうか？後も痞えますし。今日だけで後、二万五千人程転生させないと行けませんので」

「随分多いんですね？」

「そうでも無いですよ？最近は大きな戦争も無いですし。WW2の時とか、同僚に過労死した人とかいますし」

神様も大変なんだな。まあ、どのような仕事でもそれなりの苦労は有るって父さんも言ってたしね。

「ええつと、転生の事ですけど僕は「言って置きますけど、拒否権は有りませんよ?」・・・そうですか」

「では、説明に移りたいと思います。まず、貴方が転生する世界ですが、貴方達の世界で『リリカルなのは』と呼ばれている物語に酷似した世界です」

リリカルなのは?すごく危険な気がするのは僕だけでしょうか?あの作品は原作キャラの周りではそれ程人死とかないけど、普通に世界単位で滅亡しかねない危険物とか、多かつたきがある。

「そうです、そうです。結構危険です。私たちが定めた危険度ランクにするとC+と云った所です」

「・・・もつと上が有るんですか?」

「有りますよ?個人単位で惑星破壊できる、ドゴボーとか。普通に神様と喧嘩する聖闘士が居る世界とか。他にも・・・」

「いえ、もう良いです。因みに僕の世界の危険度はどの位ですか?」

「Dですね。危険な兵器は有りますが、流星に惑星を破壊するとか

出来ませんし」

そこが基準なんだ。

「でまあ、普通に転生しても危険な訳でして、そう云う世界の場合  
幾つか願いを聞いて上げる訳ですよ。今回のケースの場合は三つで  
すね」

願いかあ、『転生したく無い』は駄目だろうし、如何しようかな。  
SSとかだと他の作品の能力とか貰ってたけど。

「出来ますよ？但し、危険度ランクC+以上の世界の能力は駄目で  
すからね。世界の崩壊に繋がりますから」

戦闘民族とかやば過ぎるもんね。うゝゝんだとすると如何しよう？

「その前に、質問良いですか？」

「構いませんよ？」

「記憶とかはどうなりますか？」

良くSSでは原作知識を使って、旨く立ち回る主人公の姿が描か

れているけど、果たして『無条件』で記憶は引き継がれるのだろうか？

「引き継がれませんよ？どの様な能力より『前世の知識と経験の引き継ぎ』の方がチートですからね」

「・・・良し！決まりました」

「それでは聞きましょうか？」

「はい。一つ目は『前世の知識経験の引き継ぎ』二つ目は、『魔力量SSS』」

「おや？魔導師ランクSSSでは無いんですね？」

神様が首を傾げる。それはそうだと思う。でも二つ目の願いは三番めの為の伏線だ。

「そして、三つ目！」

何度も言うけど、僕は戦うとか絶対無理。なら、僕の代わりに戦ってくれる存在が居れば良い。卑怯だとは思う。それでも無理な物は無理。だからこそ・

「・サーヴァント下さい！！」





## 第二話 騎兵な彼女との出会い

「サーヴァント下さいー!!」

「ふむふむ、なるほど。魔力量SSSはサーヴァント維持用ですか。悪くない組み合わせだと思いますよ。た、だ、し、あくまで、『魔力量がSSS』ですから、貴方自身には魔法を使う才能は有りませんよ?」

勿論それは想定済み。中途半端に戦う才能とか有るよりもこの方が良いと判断した。

「あの世界の危険度はCですから、許容範囲内ですね。・・・うん大丈夫です。それで、サーヴァントですが、どんな英霊をお望みですか?クラスか真名でお答え下さい」

「それって如何違うんですか?」

「クラスで指定した場合、そのクラスに該当する英霊をランダムに選出します。真名の場合はこの英霊にするかは選べますが、クラスの指定は出来ません」

そうになると、真名で選んだ方が良さそうかな?そうすれば、少なくとも信頼の置ける英霊が呼べそうだし。・・・ジル・ド・レエとかは、正直無理です。

候補はやっぱり、『騎士王アルトリア』『クランの猛犬ク・フリーリ

ン』『架空の英雄佐々木小次郎』辺りかな？単純に強いし、性格も某英雄王ほど付き合い難そうでは無いし。・・・アルトリアの場合食費がやばそうだけど。

「決まりましたか？」

「うーん。よし、決まりました」

僕はその英霊の真名を告げる。

「それでは、召喚します。少し下がって下さいね」

言われて少しだけ距離をとる。すると神様の前の地面に魔法陣が現れる。

「一応こう云うのは様式美ですからね。本当は呪文とかも再現するべきですが、時間も余り無いですし」

そして魔法陣が光を放ち、その光が収まると其処には -

「 - 問おう。貴方が私のマスターか？」

金系の髪。深緑の瞳。黒いスーツを着た、一見すると少年の様に  
も見える少女の姿だった。

「・・・・・・・・・・は？」

もう一度言おう。黒いスーツを着た少年の样にも見える少女だった。少女は僕の動揺に気付いたのか、首を傾げながら再び問う。

「貴方が私のマスターですよね？」

「あ、う、うん！！そう僕が君のマスターだよ」

「それでは改めて、サーヴァントライダー召喚に従い参上した。これより我が身は貴方の盾と成り、我が愛馬は貴方の剣と成る。ここに契約は完了しました。これから宜しくお願いします。マスター」

「・・・・・・・・・・えっと聞き間違いじゃ無いよね？今この子、『ライダー』って名乗ったよね？」

「なんでさ」

### 第三話 いざ新たな人生へ

「えっとライダー？幾つか確認したい事があるんだけど良いかな？」

「はい、私に答えられる範囲でしたら」

「まず君の真名だけど、アルトリアで間違い無いよね？」

僕の言葉に、彼女、『アルトリア』は肯定の意を示す。

「はい、確かに私の真名はアルトリアです」

うん、良かった。もし違うとか言われたら如何しようと思った。  
でもこれで余計に疑問が増えた。

「じゃあ、次の質問だけど、如何してライダーなの？騎士王なのに」

「それは恐らく、其処に居る神の仕業でしょう」

「それは流石に人聞きが悪いですね。ちゃんと説明した筈ですよ？  
真名を指定したらクラスは選べないと。その結果『本来有り得ない  
クラス』で召喚されても、私の責任ではないですよ」

それでもこれは無いと思う。百歩譲ってライダーでも構わないと

も思う。でも、なら、何で。

「何で、黒スーツ何ですか？アルトリアは、『過去の英霊』ですよ？何で現代のスーツ姿何ですか？」

「マスター、それでしたら、恐らくは私の宝具が原因だと思われるます」

「宝具？そうか、君もサーヴァント何だから、宝具が有るのは当たり前だよな？」

如何も色々な事が有って忘れてたけど、サーヴァント何だから宝具が有るのは当然だし、宝具はその英霊の象徴な訳だから、ソレを見せて貰えば僕の疑問も解決する筈だ。

「じゃあ、君の宝具を見せて貰っても良いかな？」

「解りました」

僕の言葉に従いライダーは意識を集中させる。そして次の瞬間、僕の眼前にソレは姿を現した。ってこれは！？

「バイク！？」

そうそれは何処から見てもバイクだった。しかし僕の中の『何か』

「これが違つと訴え掛けて来た。これは唯のバイクなどでは無い。これこそが、騎士王が唯一騎乗するに値する相棒であり、僕の敵を打ち砕く為の剣なのだ。」

「これが、私のライダーとしての宝具、疾駆せし鋼鉄の騎馬です」  
V・MAX

騎士が己の愛馬を自慢する様に、誇らしげに語るライダーの姿を見て、僕は漸く納得する。ああ、確かに彼女は騎兵だ。そう思った矢先、僕の右腕に鋭い痛みが走る。

「つつ！何だこれ？・・・もしかして令呪？聖杯戦争でも無いのに？」

僕の右腕に浮かんだのは、間違い無く令呪だった。令呪とは、聖杯戦争に置けるマスターのサーヴァントに対する絶対命令権。これがあるからこそ、マスターよりも遥かに強大なサーヴァントを従わせる事が出来る。でも、何でこれが？

「それは、私からの贈り物です」

「贈り物？」

「そうですそうです。それを旨く使えば、いざと云う時きつと役に立つ筈です」

青白い顔に笑みを浮かべて神様はそういった。

「さあ、それでは時間です。貴方の来世が良き物に成る事を祈つてますよ」

「それでは参りましょう」

V・MAXに跨ったライダーが促す。でもその前にして置く事がある。

「その前にライダー、僕の名前を教えて置くよ」

そう、名前の交換。僕は彼女の真名を知ってるのに、彼女は僕の名前を知らない。これは不公平だし、何より、マスターなんて呼ばれ方は正直はずかしい。唯一つだけ懸念がある。僕の名前はFATEの有る人物と同じなんだ。僕の名前を聞いて彼女に不快な思いをさせないだろうか？

「大丈夫ですよ。名前何て所詮記号ですし、貴方はその人物ではないのですから」

「うん、そうですね。ライダー僕の名前は『きれい綺礼』『みやまきれい宮間綺礼』だ」

F A E Tの登場人物の一人『言峰綺礼』と同じ『綺礼』何の偶然か文字まで同じ。正直創作物の登場人物でも、同じ名前と言うのは驚いた物だ。

「成る程、成らばキレイと呼ばせて頂きます」

そう言つて微笑むライダー。神様の言つた通り、あっさりと彼女は受け入れた。

「その、ライダー？僕の名前に思う所とか「言峰の事ですか？」」

「確かに、言峰綺礼に付いては色々思う所はありますが、それは、キレイとは関係有りません。何より、マスターで有る貴方が、私に己の名を預けて下さったのですから、その信頼に答えないなど、騎士で有る私の矜持が許しません」

「・・・有難う。ライダー」

「それでは、改めて参りましょうキレイ！」

「うん！行こうライダー！」

そうして、僕らはV・MAXで走りだした。走り出したのは良いんだけど・・・。



「ねえ、ライダー？一つ聞いても良いかな？」

「如何しましたかキレイ？」

「何で僕は、ライダーにおんぶされて紐で縛られてるのかな？」

「VIMAXは、一人用ですから」

「もう一つ良いかな？何処まで行けば良いの？」

「それは勿論」

太陽の様な笑顔で、彼女はアクセルを全開にする。

「・・ピリオドの向こう側までです！」

人選間違えたかも？そう考えて居る内に僕達は光に包まれる。きつとこの光が晴れるころには転生してるんだろっな。そんな事を考えながら僕の意識は融けていった。

### 第三話 いざ新たな人生へ（後書き）

漸く転生しましたので、後書きです。

この小説のコンセプトは、『最後まで一切戦わないオリ主と、バイクを乗り回す騎士王』です。

サーヴァントは、後二人無いし三人は召喚されます。

一応原作のサーヴァントです。

此処までお読み頂いた皆様有難う御座います。

## オリ主の設定とサーヴァントステータス

キレイ・ミヤマ

性別 男

年齢 15才

慎重・体重 162cm 52kg

属性 中立・中康

出身 ベルカ自治区 コトミネ孤児院

性格 臆病物 へたれ お人よし

好きな物 平和

嫌いな物 争い事全般

備考

魔力量SSSを誇るが魔法を使う才能は無い。  
本人曰く「魔力タンクに僕はなる！」  
主人公の癖に、美形でも無く極々普通の容姿。  
書いてる人間が『兎に角普通に』をコンセプトにしてる為、無双  
とかは無い。

クラス ライダー

真名 アルトリア・ペンドラゴン

性別 女性

慎重・体重 154cm 42kg

属性 秩序・善

ステータス（FATE風）

筋力 C

耐久 C

敏捷 B

魔力 A

幸運 B

宝具 B+

## クラス別能力

対魔力C 二節以下の詠唱による魔術を無効化する。

大魔術、儀礼呪法など大掛かりな魔術は防げない。

なお、ミッド及びベルカ式魔法の場合、Aランクまで無効化する。

騎乗A 幻獣・神獣ランクを除くすべての獣、乗り物を自在に操れる。

特にバイクならどのようなモンスターマシンでも乗りこなせる。

## 保有スキル

直感A 戦闘時、つねに自身にとって最適な展開を”感じ取る”能力。

資格、聴覚に干渉する妨害を半減させる。

尚、バイク搭乗時には、自己にとっての最適なライン取りを

”感じ取る”事が出来る。この為、実質上どのような条件下でも

ライダーは十全に、バイクを乗りこなせる。

魔力放出A 武器、ないし自身の肉体に魔力を帯びさせ、瞬間的に放出

する事によって能力を向上させる。  
バイク搭乗時、後方や側面へ魔力を放出する事により、  
本来有り得ない急加速や急速転回を可能とする。

## 宝具

インヴィジブル・エア  
風王結界

ランクC 種別 対人宝具

レンジ1～2 最大補足1人

不可視の剣。

シンプルではあるが白兵戦において絶大な効果を發揮する。  
協力的な魔術によって守護された宝具で、剣自体が透明という訳で  
はない。

バイク騎乗時には、前方に鏃の様に展開する事により高い空力特性を得る。

## オリ主の設定とサーヴァントステータス（後書き）

宝具は本編で使用されたら追加します（ネタばれになりますので）

#### 第四話 転生先には外道神父！？

そうして僕は転生した。僕が今居るのは、ベルカ自治区に有る孤児院。それは良いんだ、記憶を引き継いだ以上、この世界の両親を親とは思えないだろうし、それに僕にはライダーが居るから寂しくも無いしね。問題なのは、この孤児院に引き取られた子供達だ。

「こらケイネス！ウェイバーを苛めたら駄目だよ。……ってソラウ！ここぞとばかりにケイネスを蹴らないの！トキオミも手伝って！ああもう、カリヤとアオイは手伝ってくれるのに、如何して君達はそう自分勝手なのかな！」

見て解る様に、FATE/ZEROのキャラにそっくりな子供達が居るのだ。因みにリュウノスケとかマイヤも居る。キリツグとアイリは、少し前に養子縁組が決まってここを出て行った。だけど最大の問題は、ここの管理をしている『神父』だった。

「ふむ。子供が元気なのは実に結構な事じゃないか。そうは思わないか？キレイよ」

そこに居たのは、胡散臭い微笑を浮かべた似非神父。

「……お早う御座います。神父様」



そう、あの言峰綺礼だった。正確にはキレイ・コトミネだけど。そして僕は、キレイ・ミヤマ。二人ともキレイなのでややこしい為、皆は僕の事を、『キレイ』言峰の事を『神父様と呼ぶ。

「この子達が健やかに暮らせるのも、総ては聖王陛下の思し召し。日々の感謝を忘れぬ様にな」

これだけ聞いていると極真つ当な神父に見えるのに、如何してこの人はこうまで胡散臭く見えるのだろうか？これは僕だけでは無く、ライダーや他の子供達も抱いている思いだ。まあ、別に悪巧みとかしてる訳でも無いんだけど。

「さて、私は少し出かけて来る。後の事は頼むぞ」

「はい、行つてらっしゃい神父様」

「うむ、行つて来ます」

はあ、未だに慣れないんだよねあの人には。原作の言峰とは別人なのは解かってるけど、ああも言動や行動が同じだね。如何しても警戒してしまうんだよね。

「キレイ、私もそろそろ教会に行く時間ですので」

聖王教会のシスターが着る服を身に着けたライダーを呼び止める。

「ライダー、とアルトリア、ちょっと待って！ 渡す物が有るから」

そう言つて、台所へと走る。そしてある物を持って急いで戻る。

「はいこれ、お弁当」

そう言つて彼女に包みを渡す。その中に入っているにはサンドイッチだ。それを受け取ったライダーは、一瞬驚いた顔を浮かべた後笑顔で。

「有難う御座います。ああこれは、お昼が楽しみです」

「簡単な物しか作れなくて御免。アオイにあんまり負担掛けられないから」

「そうですね、キレイやカリヤが手伝っているとは言え、家事の殆どをアオイに任せてますから」

それでは行つて来ますと言つて、ライダーも出て行つた。現在ライダーは聖王教会でシスター見習いをやっている。ライダー曰く『私はニートでは有りませんから』らしい。それ自体は良い事だと思

うし、最近では友人も出来たそうだ。その友人には良く騎士に成らないか？と誘われているらしい。でもライダーは『私には既に主が居ますから』と言って断っているそうだ。

「本当今日も平和だなあ」

現在新暦65年、地球ではPT事件の真つ最中で有るが、ベルカ自治区とここは何時もと変わらず平和である。

#### 第四話 転生先には外道神父！？（後書き）

神父様の外見は第五次聖杯戦争基準。

スペックは第四次基準で普通に強いです。

## 幕間一 ライダーの現状（前書き）

幕間は基本的にキレイ以外の視点です。

## 幕間一 ライダーの現状

キレイと共に、この世界へとやって来てはや15年。数多くの戦<sup>いくさ</sup>を潜り抜けた生前、そして、自身の迷いを吹っ切る切欠と成った聖杯戦争。それらと比べて、この15年の何と穏やかな事か。

「とは言え、まさかこの世界にコトミネが居るとは思いませんでした  
たが」

私の中には、複数の『記憶』が有る。正義の味方を目指す少年と共に、駆け抜けた記憶。キャスターの罠に嵌り彼の敵となり、そして赤い少女と再契約を結んだ記憶。聖杯の泥に飲まれ、彼の手によって討たれた記憶。それだけでは無い。誰も知らない筈のあの虚ろな四日間の記憶まで有るのだ。恐らくはあの神の仕業でしょうが、何を考えているのでしょうか？唯一つだけ言えるのは、それらの記憶 - 第4次聖杯戦争も含めて - の私は、剣の騎士<sup>セイバー</sup>だった。だから今の私は、『騎兵<sup>ライダー</sup>』で有る為に幾つかの制限が有る。その中でも最たる物が自身の宝具だ。

「約束された勝利の剣の真名開放はやはり出来ない様ですね。全<sup>ア</sup>て遠き理想郷も同様ですか。まあ、所持出来るだけマシだと思うしか有りませんね」

とは言え、悲嘆に暮れる必要も無い。そもそもこの世界に置いてエクスカリバー<sup>エクスカリバー</sup>約束された勝利の剣は明らかにロストロギアだ。管理局に知られ

ば回収の対象に成っていたかも知れないだから、有る意味では僥倖かも知れない。それに、唯の剣としては使えるのだから戦闘には支障は無い。

「真名開放が出来無いのに所持は出来る。恐らくは、私がライダーだからでしょうね」

ライダー  
騎兵とは即ち、『何かに騎乗して戦う者』だ。詰まり、騎乗した状態で使用可能な武器ならば、使用は許されると云う事で有る。その証拠に、嘗てのライダーである『征服王イスカンダル』や『メデューサ』は、ライダーとしての宝具の他に武装を所持して居た。

「V-MAXに騎乗した状態で使用した宝具は使用可能、詰まり風  
ビシフル・エア  
王結界は使える」

と云うより、『使用しないといけない』が正しいですが。あれが無いとV-MAXはまともに走行出来ない。

「当面の問題は、  
エクスカリバー  
約束された勝利の剣の扱いですか」

手っ取り早いのは、アームドデバイスとして登録する事でしょうか？その為にも、何処かの組織に所属するのが好いかも知れません。

「管理局は有りませんね。海に配属されたら、キレイの守護が出来ません。ならば、聖王教会にしましょうか」

幸い私が、今居るのはベルカ自治区。教会に所属したいと言って、も誰も不思議には思わないでしょう。そうと決まれば即行動、兵は神速を尊ぶと言いますからね。

「キレイ、貴方は私が守って見せます」

決意も新たに行動を開始する。・・・所でやはり免許は必要でしょうか？思わず溜息が出る、免許取得の為の資金を如何捻出しましょうか？幾等なんでも、コトミネに頼む訳には行きません。言えば出してはくれるかもしれませんが、何が悲しくてコトミネに頼み事をしなければいけないんですか！？

「だからと言って、キレイに頼むのも僥倖有りません。はあ、宝具の事よりまずはアルバイトでも探しましょうか？」

少なくともあの虚ろな四日間を過ごした私の様に、ニートに成る訳にはいきません！！



まあ、この私の懸念も、聖王教会にシスター見習いとして、所属する事に成って大体解決したのですけど。

## 幕間一 ライダーの現状（後書き）

ライダーさんによる現在の戦力分析と、聖王教会に所属した理由です。

後一応、約束された勝利の剣は所持してます。

真名開放出来ない理由は、『バイクに乗った状態で両手で剣を振りかぶると確実に転倒するから』だったりします。

ZERO本編では片手で振るっていたので唯の武器扱いです。

## 第五話 彼女の友人は修道女（前書き）

キレイはFATEで言う所の、藤村大河ポジションです。  
詰まり日常の象徴です（コメディーリリースとも言っ）

## 第五話 彼女の友人は修道女

二人の人物が対峙していた。一人は言わずもがなライダーだ。黒スーツに身を包み、如何もあれをバリアジャケットと言い張る気らしい。まあ、対魔力スキルも有るし、大丈夫だと思うけど。V-MAXに騎乗し、左手には約束された勝利の剣を構えていた。もう一人は、双剣型アームデバイス。如何見てもトンファーにしか見えないけど、を構えたシスター。

「えつと何でこう成ったんだっけ？」

確か、ライダーの友人が僕に会ってみたいとライダーに伝えたらしく、僕自身、ライダーの友人に興味も有ったし、ライダーの願いも有って聖王教会に来た筈何だけど……。着いて見ると行き成りこの展開、それにあのシスター何処かで見たような。

「それでは非才の身ですが、全力でお相手致します」

「・・・貴女が非才なら、世の騎士の殆どが無能に成ると思うのですが。良いでしょう、キレイの観ている前で無様を晒す訳には行きません。我が愛馬とこの剣に掛けて、貴女を打倒して見せましょう」

そうして駆け出すシスター、ライダーもそれに合わせる様にV-MAXを走らせる。・・・僕に理解出来たのは此処まで。気が付い

た時には、決着は付いていた。いや本当に何が何だか解からなかった。所詮一般人の僕には、目の前で繰り広げられた光景の十分の一も理解する事など出来なかったのだ。まあ、それはともかく。

「で？結局何が如何なつてこうなつたの？」

勝負を終え、互いの健闘を称え合う二人に、さつきから感じていた疑問を投げかける。

「・・・・・・・・・・」

アレ？何その、『何言つてんのコイツ？空気読め』的な沈黙は？僕が悪いの？暫く場には微妙な空気が流れる。タツプリ五分程の時間が経過した時、『アッ！』と何かに気付いた様にライダーがポンと手を打つ。

「そう言えば、キレイに事の経緯を説明してませんでした」

「・・・漸く気付いてくれた様で何よりだよ」

少しばかり皮肉げな口調に成つても仕方ないと思う。僕はあくまで、ライダーの友人に会いに來ただけ何だから。それなのに完全に置いてきぼりだし、いやまあ、怒ってる訳じゃ無いよ？唯ほっとかれてさびしげフンゲフン！そうじゃ無くて、ライダーの隣に居るシ

スターの事とか、何で行き成り戦闘が始まったのかとか、その辺りを説明して欲しかったただだから。

「そう云う事でしたら、私の方からご説明します」

シスターが一步前に進み出て、事の経緯を説明する。まず、このシスターの名前は『シャツハ・ヌエラ』その特徴的なデバイスから予想は付いてたけどやっぱり本人だったんだ。それで、二人の関係はライダーが、シスター見習いとして聖王教会に出入りする様に成つてすぐに、ちょっとした失敗をしてしまったのだが、それを偶然通りがかったシスターシャツハがフォローしてくれたそうだ。どんな失敗だったか尋ねると、慌ててライダーが止めた為聞き出す事は出来なかった。

「成る程ね、じゃあさっきの戦いは何だったの？」

「シスターアルトリアとは、以前から手合わせの約束をしていました。それで今日、その約束を果たす事になったんです」

・・・もしかして、僕はその次いでなんじゃ無いかな？うっんでもまあ、ライダーの友人と会うと云う目的も果たせたし、これはこれで良いのかな？二人共楽しそうだったし、戦うのが楽しいって云うのが僕には良く理解出来ないけどね。でも友達かぁ、あれ？

「そう云えば僕って友達居たっけ？」

気付いては行けない事に気付いた様な気がする。孤児院の子供達は、皆年下だし弟や妹って感じだね。ライダーは、僕のサーヴァントでパートナーだし、……………何か泣きたく成って来た。

「キレイ！？如何したのですか！？行き成り蹲って」

「ハハハハハ、ボクハトモダチのイナイカワイソウナオトコナンダ」

「えっと、如何成されたのでしょうか？」

蹲って地面に、のの字を書き始めた僕に二人が話しかける。結局ぼくが立ち直ったのはそれから暫くしてだった。

## 第五話 彼女の友人は修道女（後書き）

戦闘描写は次の幕間二で。

キレイはあくまで一般人です。

その為、ライダーや原作キャラが、当たり前のようにやっている事が  
良く理解出来ません。

特に高速戦闘なんてやられたら、目が付いていきません。



## 幕間二 騎兵と修道女（前書き）

初の戦闘描写です。後、今回は一応三人称です。

## 幕間二 騎兵と修道女

- 騎兵は思考する、眼前の相手の事を。双剣を構えこちらに駆ける彼女の事を。生半可な相手では無く、手加減など出来様筈も無いと -

- 修道女は思考する、対峙する相手の事を。鋼鉄の騎馬に跨り迫り来る彼女の事を。相手に取って不足なし、全力で打倒して見せようと -

- 二人は思考する、この戦いに置ける最善手を。勝利する為に思考する、眼前の強敵<sup>とも</sup>に打ち勝つ為に。思考し続ける -

最初に、攻勢に打って出たのは、修道女・シスターシャツハ-だった。自身のデバイスで有る、ヴィンデルシャフトを構え騎兵<sup>ライダー</sup>の駆る、V-MAXの右側面に回り込もうとする。無論その意図に気付いたライダーは、車体をスライドさせ約束された勝利の剣を構えた左側面にシャツハを誘導しようとする。<sup>エクスカリバー</sup>

「そう旨くは行きませんよシャツハ！」

古来より、馬上の相手に対して有効な手段とされるのは『武器を構えた側を避け、手綱を握った側に身を置く事』だ。何故ならば、馬を御する為には手綱を放す訳には行かず、また、武器を持ち替えようとすれば隙が生じる。それは、バイクと云う科学が生んだ騎馬にも共通した弱点と言える。故に、シャツハはその定石に従った。しかし、相手は彼の騎士王、その様な定石は知り尽くしている。故に、シャツハの目論見は意図も容易く看過されていた。そう今の所は。

(・・・可笑しい。攻めが単調過ぎる)

シャツハが回り込もうとし、ライダーがそれを防ぐ。そんな遣り取りを、さらに二度繰り返した所でライダーは違和感を感じた。

(既に通じない事は理解した筈、ならば何故繰り返す?)

疑問を感じながらも、再び回り込む為に接近して来たシャツハに対処しようとした瞬間、その姿が消失した。そして、次の瞬間ライダーの左側面に出現する。

「ハッ！」

「くっつ！？」

それまでとは明らかに違う速度で繰り出された横薙ぎの斬撃を辛うじてかわす。そこで漸くシャツハの意図に気付く。

（初めからこれを狙っていたと言う訳か……。その為に何度も同じ行動を繰り返し、こちらの思考を誘導した）

同じ速度で、同じ行動を繰り返せば嫌でも目が慣れる。それだけでは無く、無意識下で『シャツハは、左側面には移動し無い』と云う考えを植え付ける事が出来る。その上で移動魔法を用いて左側面に移動すれば如何なるか？結果は見ての通りだ。

（今のをかわしますか）

一方のシャツハも、完璧に決まったと思った一撃をかわされた事で少なからず動揺していた。普通の相手なら、確実に今で終わっていた。

（成らば此処からは出し惜しみ無しで行きますよ！）

そう決意したシャツハを尻目に、ライダーは突然その場で方向転

換して、背を向けて離れていった。一瞬逃げたかと考えるが、ライダーがその様な臆病風に吹かれる様な人物では無い事は、シャッハも理解していた。成らばこれは。

（距離を取り一気に加速する気ですね。そのまま車体をぶつける気か、それとも・・・）

こんどは、シャッハが思考を縛られる番だった。正面からぶつか  
る？却下、確実に押し負ける。再び側面？却下、同じ手はもう通じ  
無い。成らば如何攻める？そう考えた後一つの結論に達する。

（正面は駄目、側面も駄目なら跡は一つだけ）

そして奇しくも、開始時と同じ様に向かい合う。違う点があると  
すれば、次で決着が付くと云う所か。

（向こうもこれで決める気か。望む所！）

エクスカリバー  
約束された勝利の剣を下段に構える。何らかの策が有ったとて、  
もはや関係無い。策が有るなら、その作每切り捨てるまで。そう決  
意し、アクセルを全開にしV・MAXを加速させる。それに応じる  
様にシャッハも駆け出す。間合いに入った瞬間、再びシャッハは移  
動魔法を使用し、こんどは、ライダーの頭上に出現する。それに対  
してライダーは、ブレイキを掛けV・MAXを停止させる。無論行

き成り止めようとしても、バイクと云う物はそう簡単には止まらない。それでも止めようとすれば、後輪が浮いてしまふ。そう、今頭上から襲い掛って来た、シャツハに向かって。

「なっ!？」

ウィリィを逆にした様なそれは、『ジャックナイフ』と呼ばれるバイクを用いたトリックの一つだ。バイクが急停止した時、後輪が浮き上がるのに合わせて体重移動を行う、その結果この様にウィリィを逆にした様な体制が生まれる。更に、ライダーは自身の保有スキルである、『魔力放出』を用い、それを更に加速させた。それにより、本来のジャックナイフよりも遥かに角度が上がり、もはや垂直に近くなる。そして文字通りナイフの如くシャツハに襲い掛かった。

「ぐっつ!？」

咄嗟に、ヴィンデルシャフトをクロスさせ防ぐが、威力を殺し切れず弾き飛ばされる。そうして地面に落下した。砂塵が巻き起こり、それが晴れるとそこにはシャツハの姿は無かった。

（何処へいった？上？右か？左？違う何処にも居ない!？）

その時、ライダーの持つ未来予知染みた直感が警鐘を鳴らす。そ

の直感に従い、再びアクセルを全開にしその場を離れようとするが。

「れっぶういちじん  
烈風一迅！」

ライダーの下から、嫌地面から飛び出したシャツハの魔力付与斬撃をまともに受けてしまう。

「苦つ、まさか下から来るとは・・・」

シャツハの切り札足るその魔法の名は、『せんじんしつぐ旋迅疾駆』物質透過跳躍を可能とするそれを、地面に叩き付けられる際に使用し地中に逃れ、その後にライダーの真下に移動飛び出し一撃を見舞ったと云う訳だ。これには流石のライダーも反応出来無かった。

（・・・旨く決まってくれましたか、しかし）

一方のシャツハも無傷とは行かない、アレだけの速度をそのまま受けたのだから。シャツハの誤算は唯一つ、ライダーのバイクを『唯の乗り物』だと勘違いした事だ。騎兵であるライダーに取っては、それ自体が一つの武器である。正に人機一体と云うべきその姿、それこそが騎兵ライダーだった。

（・・・右肩をやられたか、長くは持たないな）

単純なダメージなら、ライダーの方が上だった。ライダーの誤算は一つだけ、それは魔法を使う相手との実戦経験の無さだった。魔法と魔法その違いを理解する為には、実際に戦って見るしか無い。しかし、クレイと共にこの世界に来てはや十数年、一度もその機会は無かった。孤児院での生活は神父の存在が有ったが、基本的に穏やかで平和な物だった。その上クレイが、争い事を望まない人間で有る為、余計にその機会を得る事は叶わなかった。

（今回の模擬戦はそう言う意味でも都合が良かった）

お陰で貴重な経験が出来た。だがしかし。

（クレイが見てますからね。負ける訳には行きません！）

エクスカリバー  
約束された勝利の剣を、再び下段に構える。

「風よ！」

剣に風が集まる。ライダーの持つ宝具『インヴァジブル・エア風王結界』だ。本来ならこのように、常に剣に纏わせ、光の屈折率を変更し『不可視の剣』を作り出す宝具なのだが、現在ライダーは違う用途に用いていた。それは、VIMAXの前方に鍔形に広げて正面に展開され、車体正



面を覆いこむ事により、空気抵抗を極限まで抑える事に成功していた。しかし、今のライダーはそれを本来の用途に使用している、すると如何なるか？当然克服した筈の空気抵抗に再び襲われると云う事、だがそれでもライダーには勝負を急がなくては行けない理由があった。

（ダメージはこちらの方が上。時間が経てば不利に成る。ならば、一気に決める！）

そんなライダーの意図を悟ったのか、シャツハもヴィンデルシャフトを構えた。

「次で終わりですね」

「ええ」

「とても心躍る戦いでした」

「本当に、またやりたい物です」

そして、互いに最後の一撃を繰り出す。

「烈風一陣！」

その一撃をライダーは敢てかわさなかった。全てはその一撃に耐え、その後に出来た隙に今出来る全霊を叩きつける為に！

「くっ！？」

そうして一撃を受ける。受けて、そして、耐え切った。

「貰ったぞ！風王鉄槌！！」  
ストライク・エア

インヴェジブル・エア  
それは風王結界の変則的使用法、剣に纏わせた風を開放する瞬間、それまで圧縮されていた空気を烈風の如く打ち出す。その様はまさしく風の破城槌！そうして繰り出された一撃はシャッハに直撃した。そして。

「で？何が如何なってこうなったの？」

勝負はライダーの勝利に終わった。互いの検討を称えあう二人にキレイが問う。

「  
」  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
」  
「

## 幕間二 騎兵と修道女（後書き）

バイクでの戦闘はやはり難しい！まあ、ジャックナイフ書けたから  
良しとしましょうか（笑）

## 第六話 聖遺物と不審者

何とか立ち直った僕は、シスター・シャツハの案内により、教会の施設を見学していた。シスター・シャツハは、こう云う事に慣れているのか見事なガイド振りだった。お陰で聖王教会に付いて少しは詳しく成ったと思う。

「この様に教会では、聖王陛下やそれに連なる方々に纏わる物品を収集管理している訳なのです」

「具体的には、どのような物が有るんですか？」

「そうですね例えば、聖王陛下が生前使用されていた品や、聖王陛下ご自身の御遺体を包んだとされる聖骸布などが有ります。特に後者の事を『聖遺物』と呼称しますね」

聖遺物かぁ、何か型月っぽいよなぁ。・・・まさか、埋葬機関とが無いよね？コトミネ神父の事を考えると有りそうで怖い。あの人普通に中国拳法使うし、何か最近ではトキオミまで習い始めるし。カレー司祭とか居たら大変な事になる。そんな益体の無い事を考えていると、ライダーが真剣な目で周りを見回しているのに気付いた。

「・・・？ライダー如何したの？」

「いえ、多分気のせいだと思うのですが・・・。誰かの視線を感じ

た物で」

「可笑しいですね、今この場は私達しか居ない筈ですが？」

気配ねえ、僕には全然解からないからなあ。でもライダーの直感  
は未来予知染みてるから、強ち無いとも言切れないな。ライダー  
は暫く警戒した後、徐に懐から一枚のコインを取り出した。そして

「そこだ！」

それを、壁の隅に向けて投げつけた。すると、壁に当たる直前で  
何かに弾かれた。

「出てくるが良い不埒物め。出て来ぬと云うなら、そのまま叩き切  
つてくれる」

ふむ良かろう。その言葉と共に、空間が揺らめき次の瞬間そこ  
には白い仮面を付けた、見るからに怪しい男が居た。ってこいつは  
！？

「アサシン  
暗殺者！」

そうそれは、暗殺者のサーヴァント、『ハサン・サッバーハ』だ

った。

「何だ、ハサンさんですか。驚かさないで下さい」

「それは、申し訳無い事をした。主より本日は、この辺りの警備を任されておりましてな。何でも、聖遺物を狙う不届き者が居るそう  
でしてな」

「成る程、そう言う事でしたか。相変わらず、お仕事熱心なのですね。・・・ロッサにも見習わせたいです」

「いやいや、私など主に比べれば」

「あらあら、ご謙遜を」

「・・・て、一寸待った!？」

「はい？」

行き成り和やかに会話し始めた、シスター・シャツハとアサシンに二人で突っ込みを入れる。

「如何なされた?何か可笑しな事でも有りましたかな？」

「「大有りです!」」

「シャツハ！何故その様な者と親しげに会話出来るのですか！？」

「何故って、昔からの知り合いですし」

「そうそう、シャツハ殿がこんなに小さいころからの付き合いですからな」

手で、自分の腰くらいの所を指す。・・・昔からの知り合い！？  
じゃあ、アサシンのマスターはシスター・シャツハの関係者と云う事なのか？

「詰まりシスター・シャツハはアサシンのマスターを知っていると？」

「ええ、ハサンさんのお仕えしている方なら良く存じて降ります」

「因みに、その御仁の名前は？」

ライダーが尋ねる。まさかと思うけど、あの人じゃ無いよね？

「騎士カリムですが何か？」

当たってた〜！？思わず石化する僕達。



「如何して固まってるのでしょうか？」

「ふむ、よっぽどシヨツクな事が有ったと見えますな」

「…………誰の所為だと思ってるんですか？」

## 第六話 聖遺物と不審者（後書き）

二体目のサーヴァントアサシン登場です。  
尚、このアサシンはZERO基準です。

**第七話 教会騎士と暗殺者 9月1日文章追加（前書き）**

あんまり進んでません。 # 9月1日午前九時に文章追加。

## 第七話 教会騎士と暗殺者 9月1日文章追加

あの後、警備を続けるアサシンと別れ、僕らは、騎士カリムの執務室に来ていた。それはまあ良いんだけど……。

「ふむ、如何したキレイ？随分と面食らった顔をしているな。ああそうか、騎士カリムに見とれていたのだな。成る程、てつきりお前はアルトリアが好みだと思っていたが……。いやはや、長年一つ屋根の下で暮らして居ても、解からぬ事は有るらしいな」

「あらあら、コトミネ神父はお世辞がお上手ですね」

何で、ここに神父様が居るの！？いや、教会関係者だから居ても可笑しく無いけど。後、ライダー？何で睨んでいるの？

「あの、何で神父様がここに？」

「ふむ、言ってなかったか？騎士カリムは私の上司に当たるのだ」

聞いて無いよ！？騎士カリムの部下ってこの人何やってるの？混乱する僕に、騎士カリムは微笑んで。

「そうですよ。コトミネ神父には父の代からお世話になっておりま

して」

「ふむまあ良い、折角の機会だ。私の仕事に付いて説明してやろう」

「御二人共、立ち話も何ですし、こちらでお茶でもしながらお話しませんか？」

「折角のお誘いだ。遠慮するのは逆に失礼に当たる。二人共座るが良い」

着席を促され、僕達は若干の居心地の悪さを感じながら座る。因みに、シスター・シャッハは騎士カリムの後ろに控えている。少ししてメイド服を着た女の子が紅茶を持ってきた。

「……………」

「……………?くれるの?」

「……………(じくん)」

無言で頷く。

「有難う」

「……………(じくん)」

何か調子狂うなあ。孤児院で年下の子供の相手は成れてるけど、皆キヤラ濃いからこういう子は如何接したら良いか解からないな。

「・・・キレイ、下がって下さい。その子供はサーヴァントです」

「へ？何言ってるの？こんな子供がサーヴァントの訳無いじゃないか？」

ライダーから、敵意を向けられて震える女の子。この子がサーヴァント何てそんな事が有る訳無い。大体、さっきアサシンに会ったばかりで、また別のサーヴァントに会う訳無いじゃ無いか。

「いいえ、この子供は間違い無くサーヴァントです。忘れたのですか？サーヴァントはサーヴァントの気配を感じ取れるのですよ？」

そう云えば、FATEではそんな設定有ったような？確か、霊体化しててもサーヴァントが近くに居れば解かるんだっけ？と成ると、この子はライダー、アサシンに続く三対目のサーヴァントって事？

「何やら、興味深い話をしているな。騎士カリム、サーヴァントなる存在が何かをご存知か？」

「ええ、存じておりますよ。警備をしているハサンも、その子も私のサーヴァントですもの」

神父様の問いに事も無げに答える。一寸待て、今騎士カリムはハサンも、この女の子も『自分のサーヴァント』って言った？一人で複数のサーヴァントを従えているのか？

「キレイ、貴方の疑問は最もですが、それは違います」

「如何云う事？」

「簡単な事ですよ。先のアサシンとこの子供は、同一人物という事です。違いますか騎士カリム？」

「良くご存知で、正解です。皆さん出てきて下さい」

- 御意 - その言葉と共に、騎士カリムの周りに複数の人影が現れた。ここまで来れば僕にも解かる。詰まりこの子も、さっきのハサンも、そしてこの人影も元は『一体のサーヴァントが分裂した者』と言う訳だ。そんな事の出来るアサシンは一人しか居ない。即ち。

「『百の貌かおのハサン』」

自らの宝具の力で、自らを複数に分ける事の出来る暗殺者。それが、彼らの真名だ。

「『然り、我等こそ一にして全、全にして一、百の貌のハサン成り』」

「……………（こくこく）」

「これは興味深い、騎士カリム説明して頂けるかな？」

「はい」

騎士カリムの説明によると、ハサンと出会ったのは子供の頃らしい。初めて彼らを目にした時、余りの不審者振りに思わず悲鳴を上げてしまったそうだ。それから、騎士カリムはサーヴァントに付いて色々調べて見たらしい。それによって判明した事とは云うと。

「歴史上、私の様にサーヴァントを従えた者は少なからず居たと云う事です。最も、他のサーヴァントに出会った事は有りませんでしたが。」

「ふむ、詰まりサーヴァントとは、過去の英雄と解釈して宜しいかな？となれば、先程の遣り取りを見るに、アルトリアもサーヴァントと云う事になるのか？」

「はい、私はライダーのサーヴァントです」

「成る程、そしてマスターはキレイと云う事か。いやはや、随分と可愛い英雄達が居た物だ」



ライダーと女の子ハサンを交互に見て、神父様はそう言った。うん確かにそうかも。おまけに女の子ハサンは仮面付けて無いし、さつきから一言も喋らない事を除けば、普通の女の子だもんね。

「さて、サーヴァントに付いてはこの位にして、私の仕事に付いて説明しよう」

続いて神父様の説明が始まった。何でも、神父様は父親の仕事を継いだらしい。その仕事の内容だけど、ベルカに因んだロストロギアの回収だそうだ。その中には当然、聖遺物も含まれる。そして、その仕事を代々統括しているのが、騎士カリムの実家で有るグラシア家だそうだ。

「とは言え、早々ベルカに関係有る遺物が有る訳でも無い。有ったとしても、管理局が回収するから余り出張する必要も無い。その後で交渉して譲り受ければ良いからな。意外と、暇な時間が多くてな。その為普段は、孤児院の経営をしている訳だ」

暇潰しなんだ。何か、キリツグ辺りが聞いたら怒りそうだな。キリツグ神父様嫌いだったから。取り合えず今日はそこで解散した。しかし、それから数日後聖遺物が盗まれるとは、その時の僕はまだ知らなかった。

## 第七話 教会騎士と暗殺者 9月1日文章追加（後書き）

子供ハサンは設定上で存在したけど、没になったキャラです。後、キレイの原作知識は、アニメを一通り見た程度です。その為、この時期に聖遺物が盗まれる事を知りません。

### 幕間三 聖遺物盗難（前書き）

お気に入り登録150件、ユニーク10000突破しました。  
有難う御座います。

### 幕間三 聖遺物盗難

教会でキレイとライダーが、カリム・グラシアとの対面を済ましてから数日後の深夜、異変は起こった。その日、何時もの様に警備を行っていた、ハサンは、違和感に気付く。

（・・・可笑しい、外で警備している筈の騎士達の気配が消えた？）

聖遺物を狙う者が居る。その様な情報が齎されてからここ数日、ハサン以外にも教会騎士が交代で警備にあたっていた。当のハサンは、サーヴァントで有る為、食事も睡眠も必要としない為 - とは云え、定期的に主から差し入れが有るが - こうして、連日の警備も問題無くこなしていた。そこに来てこの異変、遂に何者かが侵入して来たか。とハサンの身に緊張が走る。

（念の為、応援を呼んで置くか）

サーヴァントで有るハサンは、パスの繋がって居るカリムと念話で会話出来る。それだけでは無く、同じハサンで有る他の者達とも会話が可能であった。ハサンはそれを用い、応援を呼ぶ事に決めた。

ハサンが違和感に気付く30分前の事。大聖堂の周りを警備していた有る教会騎士は、不審者を発見した。

「その君、そこで何をして居る？」

尋ねながら近づく。念の為デバイスを起動させる。暗がりの中から姿を現したのは、色々な意味で『派手』な男だった。金髪に赤目蛇柄のパンツを履いた、一つ間違えれば何処ぞのホストと云われそうな格好だが、その男には不思議と似合っていた。男は近づいて来た騎士に、不機嫌さを隠そうともせずこういった。

「雑種風情が我に話しかけるとは不敬極まりない。本当なら、手ずから誅殺してくれる所だが、・・・ちっ！解かっている殺すなだろう？令呪まで使ったの命令だからな。今回の所は従ってやろう。だが忘れるなよ？この我に使い走りさせたのだ、詰まらん結果に成つたら・・・。」

誰かと念話でもしているのか、行き成り不機嫌の度合いが跳ね上がる。

「さて、行くとするか。ん？何だ雑種まだ居たのか？」

「だっ誰が雑種だ!？」

男の余りと言えは余りにも、尊大な言動に流石に騎士も激昂した。自身のデバイスで有る、槍を突きつける。

「まあ良い、退屈凌ぎに少し遊んでやろう」

言つと男は、自分の後方に手を伸ばす。すると空間が揺らめき、そこから一本の剣の柄が現れた。男はそれを掴み引き抜く、そうして出てきた剣を騎士に向ける。

「さあ雑種よ、我を興<sup>オレ</sup>じさせて見る」

「クツ! 舐めるな!？」

気合と共に突き出されたデバイスを、男は、片手に持った剣で無造作に払う。続いて繰り出されたなぎ払いも、そのまた次も、男は薄ら笑いすら浮かべながら騎士の相手をしていた。そんな遣り取りを暫く続けていると、他の場所の警備を行っていた騎士の同僚がかけ付けて来た。

「大丈夫か!？」

「ほう、流石は雑種。一匹見かけたら三十匹は居ると云う事か」

まるで、何処かの黒害虫の様だと男は笑う。事実男に取って、目の前の騎士達など虫けら同然なのだ。

「とは言え、一匹ずつ潰すのも面倒だな。早々に終らせるとしよう」

「・・・かかれー!!」

その号令に従い騎士達は男に殺到する。しかし、男はそれには取り合わず、剣を持たない方の手を目線の高さまで上げ指を鳴らしてこう呟いた。

ゲート・オブ・バビロン

「王の財宝」

再び空間が揺らめいて、今度は、大小様々な武器が切っ先を騎士達に向けて出現した。

「怯むな！何かする前に取り押さえる！」

「くくくく・・・、この我を取り押さえるだと？貴様ら雑種が？くっ、はっはっはっはっ・・・」

心底可笑しいと言わんばかりに男は笑う、群がる騎士達の攻撃を軽くいなしながら。笑い続ける、そうして一頻り笑った後、その形相が憤怒にそまる。

「雑種如きが！身の程をしれ！」

その言葉と共に、浮かんでいた武器が雨霰と騎士達に降り注ぐ。騎士達は、咄嗟に防御魔法を使用するが、そんな物は紙切れ同然と言わんばかりに、あっさりと貫通する。

「ぐああああ！」

「ウウ……」

「……何で魔法が、……き、効か……ない？」

体に数多の武器が刺さった騎士達だったが、一人として死んではいなかった。最も、死んだ方がましな重症を負った者達ばかりだが。

「ふん！言われた通り殺さずに済ませてやったぞ。これで問題有るまい？」

呻く騎士達に目も暮れず男は歩き出す。最早その歩みを止める人間は居なかった。そう、人間は。



「「「そこまでしてもらおうか。サーヴァントよ」「」」

「ほう、教会とやらは暗殺者を飼っているのか？聖職者が聞いて呆れる」

男の前に立ち塞がるのは、アサシン達だった。その総数十五人、たった一人の侵入者に対しては大げさ過ぎる数だ。最も、男は少しも動じずにアサシン達を見回す。

「闇討ちしか芸の無い暗殺者が我を止める気か？流石の我も笑えんぞ」

「然り！我らお役目果たす為、この身捨てる所存成り！」

アサシン達も解かっていた。自分達はこのサーヴァントには勝てない事を。そもそもアサシンは暗殺者、不意打ちならともかく、ともに戦えばキャスターに次いで最弱のクラス。おまけに、彼らは自らの宝具妄想幻像の効果により細分化され、元々一体のハサンで有る時に比べ増えた数だけ、その能力も細分化されている。だからこそ彼らは、一計を案じた。

（良いな！我らの身を持って時を稼ぐ！奴の目的は聖遺物と見て間違いない）

（然り！シスター・シャツハが、聖遺物を安全な場所に移すまで、ここは通さぬ！）

（行くぞ皆の衆。全ては主の為に！）

それは、自身を犠牲にした時間稼ぎだ。

「ふん、暗殺者風情が忠臣ぶるか。良からう戯れてやろう」

尊大な態度で言いながらも男は、内心アサシン達の忠義に関心していた。

（偽者だらけの世の中だが、中々如何して久しぶりに『本物』に有ったな）

だからと云って、見逃す気は無い。己に楯突いた者は悉く消す。何故ならば、男に取って己こそ法であるから。

「精々足掻けよ。暗殺者」  
道化共

そうして、絶望的な戦いが始まった。

シスター・シャツハは、聖遺物の置かれている保管庫に急いでいた。早く聖遺物を運びださねば、ハサン達の犠牲が無駄になる。本来ならこのような策に、シスター・シャツハは首を縦に振る事はない。だが、この策を提案して着たアサシン達の様子から、只事では無い雰囲気を感じ取っていた。だからこそ、早くしなければ成らない。自分の行動が遅ければ遅い程犠牲が増えるのだから。そうして保管庫にたどり着いた彼女は、有りえない者を見た。

「あら、もうここまで来たの？偉そうな事言ってる割に、あの金ぴか使えないわね」

「なっ！？わ、私」

それは聖遺物を、ケースに入れて運び出そうとしていた、自分の姿だった。

「まあ良いわ。どちらにしてもお目当ての品は手に入ったし」

「何者です！私の姿を真似るとは」

「私が誰か、何て別に良いじゃない。どうせ貴女に『私達』は捕ま  
えられないし」

「・・・捕らえます！必ず！だk「それは無理だな」がつ！？」

突然背後から聞こえた声に反応する間もなく、意識を刈り取られ  
る。薄れ行く意識の中、シスター・シャツハは、犠牲に成ったで有  
ろうハサン達の事を思っていた。

「・・・AAA騎士も不意を付けばこんな物か」

「楽に終るなら、良いじゃない？」

最早勝負の行方は決まった。十五人居たアサシンも、今では三人にまでその数を減らしていた。

「良く持った物だ。褒めてやろう」

合いも変わらず尊台な態度だが、その中には確かにアサシン達への賞賛が有った。しかし、その表情がやおら曇る。

「・・・・・・・・だが、それももう終わりだ。後ろを見るが良い」

「その様な世迷言聞くとおm「動かないで」ぬう!？」

そこに居たのは、ロープで縛られたシスター・シャツハと、それを拘束しているシスター・シャツハと同じ顔をした女だった。最も顔こそ同じだが、その姿を見れば別人だと解かる。それは、偽者の浮かべた表情だ、シスター・シャツハはあのようなサディスティックな笑みは浮かべない。

「これを離して欲しければ、今すぐ無駄な抵抗は止めなさい」

「・・・・・・・・ぬう」

アサシン達は決断を迫られた、シスター・シャツハを見捨て、尚

戦つか。抵抗を止め、シスター・シャツハを返してもらつか。選べる筈が無い。葛藤するアサシンを嘲笑いながら、偽者は決断を促す。

「……………解かった。皆も武器を捨てよ」

残ったアサシンは、その手に持った武器 - ダーク - を地面に捨てる。

「物分りの良い子は好きよ。アーチャー！行くわよ！」

「ふん、誰に命令している？」

「あら、良いのかしら？そんな事言って」

「……………チツ！」

露骨に舌打ちして、男・アーチャー - は霊体化する。

「それじゃあね？あ、この子は私達が安全圏逃げたら返してあげる」

そうして、女も闇に消えた。聖遺物と共に。翌日聖王教会は、管理局に捜査協力を依頼する事になる。

### 幕間三 聖遺物盗難（後書き）

と言う訳で金ぴか登場です。

誰がマスターかは、ご想像にお任せします。

## ユニーク一万突破記念小ネタ集（前書き）

本編で入れ損ねたネタ中心です。  
なおほぼ会話文のみです。



## ユニーク一万突破記念小ネタ集

1 所で一つ忘れて無い？

「ねえライダー、一つ聞いて良いかな？」

「何でしょうかキレイ？」

「ライダーが、シスター見習いに成った理由は聞いたけどさ。一つ疑問が有るんだ」

「・・・？疑問ですか？」

「エクスカリバー約束された勝利の剣を、デバイス扱いにするのは良いけど・・・」

「何か問題が？」

「待機形態って如何したの？」

「・・・」

「・・・」

「・・・忘れてました」

2 こうしたら良いんじゃない？

「ライダー、この腕時計付けて見てくれない？」

「・・・キレイ！？まさかプレゼントですか」

「うん、まあね。それに、それを待機形態って事にすれば良いし」

「有難う御座います。所で、文字盤に書いてあるこの白い生き物は何ですか？」

「このメーカーのマスコットらしいよ」

「・・・因みにメーカー名は？」

「『マミックス』何でも（耐水、対衝撃に優れてるから）もう何も怖くない！が宣伝文句だったかな？」

「・・・何故か不吉な予感がします」

3 苦勞人カリヤ

「カリヤ、これお願い」

「解かった」

「カリヤ君、こっち手伝ってくれる？」

「任せて！アオイさん！」

「・・・カリヤ、助けて」

「って、またやられたのかウェイバー」

「カリヤ、パン買って来い」

「ウッス！先輩。・・・ってオレはパシリか！？」

四番目はソラウだったり。

#### 4 ライダーさんの食事情

「キレイ、お米が食べたいです」

「また、行き成りだね」

「別に、日々の食事に不満が有る訳では有りませんが、時には和食が食べたくなります」

「うーん、それは解かるけど、ヘルカ自治区ヘルカ自治区に、お米は売ってないからな」

「クラナガンまで行けば」

「じゃ、今度買ってくるよ」

「お願いします」

## 5 コトミネの食事風景

「さあ、トキオミ遠慮せず食すが良い」

「・・・神父様、これは何ですか？」

「麻婆豆腐だ」

「いえ、そうじゃなくて。何でこんなに赤いんですか？」

「本場の麻婆は、皆この色だ」

「・・・本当に食べても大丈夫でしょうね？」

「無論だ。それにこれを食せば、色々特典が有る」

「特典？」

「まず、中国4千年のパウワが身に付く」

「四千年（ゴクリ）」

「さらに、グツとガッツポーズするだけで、五、六人程度なら触れずに吹き飛ばす事が出来る！」

「ガッツポーズだけで!？」

「そして極めつけたが、意中の相手に、ニコツと微笑むだけで、ポツと惚れさせ」「食べます!!」「そうか（ニヤニヤ）」

「.....グハツ亜w背drftgyふじこ1p:~@:」

「ククク.....まさかこの様な冗談に引つかかるとは」

「（偶然通り掛かったカリヤ）へんじがないただのうっかりのようだ」

その日の神父は、それは美味しそうにワインを飲んでいたそうなの

6 さあ判定は如何に？

「・・・・・・・・（もっきゅもっきゅ）」

「一応、地球産のお米何だけど如何かな？」

「・・・・・・・・（もっきゅもっきゅ）」

「あのライダー？」

「・・・・・・・・（もっきゅもっきゅ）」

「ライダー？おい。」

「・・・・・・・・キレイ」

「あ、良かった聞こえてたんだ」

「食事中は静かにして下さい」

「・・・・はい」

「・・・・・・・・（もっきゅもっきゅ）」

## 第八話 僕の悩み（前書き）

幕間三の翌日の話です。

## 第八話 僕の悩み

「では行つて来る。なるべく早く終らせて来る積りだが、その間の事は頼んだぞ」

「はい、神父様」

「要するに何時も通りつて事だな」

「・・・カリヤ、もう少し言い方つて物が・・・」

「いや、その通りだ。何時もの通り頼む」

「いつてらっしゃい神父様」

僕が聖王教会で、シスター・シャツハや、騎士カリムに会つてから数日後の事。神父様が突然の出張に出かける事になった。表向きは、神父として他世界に、同僚と一緒に布教活動に行く事になっているが、恐らくは、あの日聞いた仕事の為だと思う。詰る所、何処かの世界でベル力関連の遺物が発見されたのだろう。まあ、僕に出来る事は、孤児院の皆の面倒をカリヤ達と一緒に見る事位だけだ。

「さて、神父様もお出かけに成られたし、天気の良い内にお洗濯終らせないと」

「じゃあ、オレも手伝うよアオイさん」



アオイが家事をして、カリヤと僕がそれを手伝う。いつの間にか  
そう決まっていたんだよね。因みに、僕、カリヤ、アオイ、トキオミ  
が同じ年で十五歳。ケイネスが十三歳で、残りのソラウ、ウェイバ  
ー、マイヤが十才である。昼間は僕ら年長組み以外は学校に通って  
いる。本当は、僕らも学校に行った方が良かったかもしれないけど。ト  
キオミは来年、管理局の訓練校に入る予定だし。カリヤは、孤児院  
の経営方法を学んで、ここを継ぐ気がしい。アオイは、そんなカリ  
ヤを手伝うそうだ。うん、皆将来の事を考えてるんだなあ。……  
・あれ、僕は？そう言えば考えて無かった。

「如何したキレイ？頭抱えて？」

「……自分のノープランっぷりに絶望してた」

前世は高校生だったけど、将来の事とか考えた事も無かった。う  
ん如何しよう？ライダーと一緒に、僕も聖王教会に入ろうか？で  
もなあ、そうなると僕も、神父様と同じ格好しなきゃいけないよね。  
その辺りの事をカリヤに相談してみる。

「別に良いんじゃないか？今すぐ無理に決めなくても」

「でも皆、自分の将来の事よく考えてるし」

「そうか？オレの場合はここが好きだからだし。アオイさんも同じ  
様なもんだろ？真面目に考えてるのは、トキオミとアルトリア位だ

って」

「そこなんだよね」

このままだと僕は、自分のサーヴァントに養われる駄目マスターに成りそうだ。それは駄目だ、非常に不味い！

「はあ、本当如何しよう？」

前世から合わせれば、もう三十路過ぎなのに、こんな考え無しでいいんだろうか？ いやまあ、カリヤの言う通り、考え過ぎだとは思っただけ。結局この日は、一日中こんな感じで悩んだ。

## 第八話 僕の悩み（後書き）

一般人のキレイに、聖遺物盗難の話が伝わるのは、かなり後に成ると思います。

金ぴかに關しては、コトミネ視点で追う事になります。

取敢えず次は、本局での話かな？漸く他の原作キャラが出せそうです。

それと、明日は私用の為更新出来ません。

#### 幕間四 神父と提督（前書き）

漸く帰宅しました。

急いで書いたので、文が可笑しいかもしれません。

尚、現在の時間軸は、五月下旬です。

#### 幕間四 神父と提督

時空管理局本局、『聖遺物盗難事件』の捜査協力の為の打ち合わせに來たコトミネは、担当と成った局員から、犯人グループの信じられない行動を聞いた。

「- 詰まり、犯人の一人で有る金髪赤眼の男は、まだ、ミッドチルダに居ると?」

「少なくとも、他世界に移動した形跡は有りません。それに、クラナガンの各地で目撃情報が相次いでいます」

「・・・何を考えているのか」

そうコトミネは呟く。全く訳が判らない、こちらの予想ではとつくに他世界に逃亡したと思っていたのだが。おまけに目撃情報が有ると言う事は、犯人の男、いや、アーチャーのサーヴァント-生き残ったハサンや、比較的怪我の軽い騎士達の証言で判明した-は、まだクラナガンに居る可能性が高いという。そこが理解出来ない。何故逃げない? 何故霊体化しない? サーヴァントは、霊体化すれば視認出来なくなる。しかし、アーチャーは堂々と姿を晒していると云う。コトミネの疑問に局員は、自分の考えを話す。

「もしかしたら、捜査を攪乱する為の罠かもしれせん」

「囷、成る程確かに。そう考えれば他の仲間が姿を見せないのも頷ける。しかし、そうなるこの男は、聖遺物を所持していない可能性が高いですな」

「ええ、ですがどちらにしても放置は出来ません。聖王教会に襲撃をかけた凶悪犯を、野放しには出来ませんから」

教会騎士達を一蹴し、聖遺物を持ち出した犯人の一人と云うだけで無く。アーチャーその者も危険な存在なのだから、局員の危惧も良く判る。しかし、それには懸念事項が有った。

「この件に関して陸は何と？」

「『これは我々の問題の為、こちらで対処する』と、そんな事を言ってる場合じゃ無いのに」

「海と陸の対立は知っていたが、そこまでとは・・・」

管理局は大きく分けて二つの勢力に分けられる。一つが本局を中心として、次元航行艦を多数擁する通称『海』もう一つが各世界に存在し、治安維持を行う『陸』だ。この二つは昔から対立を続けている。対立の理由は多岐に亘るが、その中でも特に人材に関する事が挙げられる。管理局は創設時より、拡大を続けている為慢性的な人手不足に陥っていた。特に、その活動範囲が広大な次元世界その物で有る海は、少しでも人員不足を埋めようと、陸から人材を引き抜いていたのだ。だがしかし、そんな事をされれば、その分陸の戦力が枯渇するのは当然の帰結である。そうなれば、陸の活動に支障

が出てしまう。それに拠って地上部隊の治安が悪化する。また、海が人材を引き抜く。また、治安が悪化する。これを繰り返せば、陸の人間が海を嫌うのも仕方が無いだろう。

「だからと言って、変に意地を張って市民に被害が出ては本末転倒でしょうに。海<sup>我々</sup>の人間も陸<sup>彼ら</sup>の人間も、同じ管理局員だと言うのに」

「人が三人居れば派閥が出来る。それぞれに信じる物が有る上に、そのどちらもが一面の真実を付いている。中々根深い問題だ」

「それでも、根本は同じ筈なんですがね。海<sup>我々</sup>の人間がロストロギアを回収するのも、陸<sup>彼ら</sup>の人間が犯罪者を逮捕するのも、結局は市民の安全の為何ですがね」

相当溜まっていた様で、この局員・三十七歳既婚者・の愚痴を聞かされる事に成ったが、コトミネは彼の好きに喋らせていた。人の悩みを聞くのも神父の仕事、成らばこれも自分の役目だろうと考えていた。

結局下手に陸を刺激するのは不味い為、海の人員をミッドに送り込む事は出来そうに無かった。すまなそうに言う局員に、気にしないで良いと告げその場を後にする。

「どちらにせよ、数を揃えた位では意味が無い」

元々コトミネは、その点には欠片も期待していなかった。考えて見ればいい、教会騎士とアサシン総勢四十名近くを、無傷で撃破した相手に下手な人間を当てれば被害が増えるだけだ。成らば、腕に覚えの有る人間と自分とで少数精鋭で挑めば良い。幸いコトミネには心当たりが有った。

「とは言え、協力してくれるかはまだ判らんが・・・」

最悪の場合、キリツグ辺りに頼むか。そんな風に考えていると、目的の人物が姿を現した。

「お久しぶりです。コトミネ神父」

「前に会ったのは、二年前だったか？久しいな。リンディ・ハラオウン」



リンディ・ハラウン、時空管理局提督にして、時空航行艦『アイスラ』の艦長を務める才女で有る。

「息子さんは元気かね？ 確か執務官だったと思うが？」

「ええお陰様で、唯少しかり固過ぎる所が心配ですけど」

当たり障りの無い所から、会話を進める。行き成り本題を切り出しても、良い返事は貰えないと判断したからだ。その中で幾つか興味深い話題が有った。

「・・では、そのフェイトと云う娘の裁判は、旨く行きそうだと？」

「ええ、元々フェイトさんは利用されていただけですから、それに本人も捜査に協力的ですし、無罪を勝ち取るのは難しくは無いでしょう」

「成る程、それにしても若干九歳の少女に取って、些か重過ぎる試験ですな」

「ですが、フェイトさんならきつと乗り越えてくれます」

「ふむ、一度会って見たい物ですな」

「裁判が終った後で宜しければ、但し・・」

ずっとリンディの目が細められる。

「クロノの時見たいに苛めないで下さいね？」

「苛めた積りは無かったのだが、まあ、善処しよう」

そう、コトミネには苛めた覚えなど無かった。唯少しかり、父親を失った少年の心の傷を、言葉のナイフで滅多差しにただけ。その程度の認識だった。しかし、そう釘を刺されると云う事は・・・。

（中々、楽しめそうな娘だな）

思わず、何時も浮べている笑みが深くなる。それを見たリンディは溜息を付いた。

「はあ、本当にお願ひしますよ？」

「ああ、所で、そろそろ本題に入りたいのだが？」

「ええ良いですよ？流石に世間話の為に呼び出したとは、思っ  
てませんでしたし・・・」

「成らば遠慮無く」

コトミネは、居住まいを正し向き直る。そして、内容を告げた。

「聖王教会襲撃、及び聖遺物強奪犯の捕縛の為、お宅の息子さんを貸して頂きたい。一応、上への根回しは済んでいるが、やはり直接伝えるべきと思ったのでね」

この瞬間、時空管理局執務官、クロノ・ハラオウンの運命は決定した。それはもう、坂を転がり落ちる様に最悪な方に。

#### 幕間四 神父と提督（後書き）

次は、またキレイ視点、こちらでも原作キャラが増える予定です。  
バイク繋がりであの人です。

第九話 僕と彼女と兄妹と（前書き）

少しだけ遅れました。

## 第九話 僕と彼女と兄妹と

その日僕は、ライダーと一緒にクラナガンに買出しに来ていた。因みに移動手段はV・MAXでは無く、神父様の所有しているハーレーダビットソンを使った。だって、V・MAXにはサイドカーを付けられないし。もし付けられたとしても、時速400キロを軽く超えるバイクのサイドカーに乗りたとは思わない。その事も有って、出発当初は少しばかり不機嫌だったライダーも、クラナガンに到着するころには機嫌も直っていた。

「これで良しつと、ライダー他に買い忘れた物有る？」

「一寸待つて下さい。食料品、日用品、アオイに頼まれた美用品、ソラウに頼まれた釘バットって何ですかこれは！？これで彼女は何かをする気ですか！？」

「・・・聞かない方が良いと思うよ？」

「・・・・・・・・・・そうですね」

「他は？」

「あ、はい。トキオミに頼まれたプロテイン、ケイネスに頼まれた応急セット、ウェイバーに頼まれたゲームソフト。はい、問題無い様です」

改めて考えると凄い量だなあ。・・・それ以上に釘バットが気になっしょうがないけど。何か最近、ソラウが益々過激に成ってる気がする。ケイネスも大変だよな。だからって、ウェイバーにあたるのは如何かと思うけどね。

「そう云えば、ライダーは何も要らないの？」

「そうですね、今の所必要な物は有りません。そう言うキレイも、何も買ってないじゃ無いですか？」

「あれ？そうだったっけ？」

言われて苦笑する。そう云えば、皆の事はかり考えていて自分の事を忘れてた。これじゃ、ライダーの事言えないよね。それに、折角クラナガンまで来たんだし、このまま帰るのも勿体無いかな？

「ねえ、ライダー？帰る前に、少しだけ寄り道してこっか？」

「はあ、寄り道ですか？」

「そうそう、何か美味しい物でも食べてこようよ」

キュピーン！何かそんな音と共にライダーの目が光った気がする。あれ、僕何か失敗した？

「そうですか！それも良いかもしれませんね。ああそう言えば、この前マイヤが雑誌で評判のケーキ店の話をしていたのですが・・・。いえ、別に私が食べたい訳ではなく、あくまで、そう、あ、く、ま、でマイヤの為にですね。ええそうです、考えて見れば彼女も何も頼んで無いじゃないですか？それはいけない、ええ、いけませんとも！同じ孤児院で暮らす仲間なのですから、彼女だけ何も無いのはしのびない。ですから・・・」

「解った！解ったから、落ち着こう！」

「・詰まりこれは、マイヤの為。そう！決して私がたべゝ如何しました？キレイ？」

「いや、行き成り素に戻らないでよ・・・」

結局ライダーの勧めに従って、人気のケーキ店に行く事に成った。

「うーん、流石に雑誌に載るだけ有るね」

「はい、どのケーキも至高の一品でした・・・」



美味しいケーキを食べて満足したのか、幸せそうな表情で歩くライダー。・・・それは良いけど、流石に全種類のケーキをホールで頼むのはやり過ぎじゃ無いか？お店の人引いてたよ？そんな事を考えながらハーレーの止めてある場所に行くと、見るからに柄の悪そうな人達が、ハーレーの周りにたむろして居た。

「ちっ！さつさと動きやがれってんだ！」

「兄貴。もう諦めましょうぜ？」

「そ、そうなんだな。も、もつか、帰るんだな」

「五月蠅い！俺はこのバイクを頂くって決めたんだよ！」

如何も、ハーレーを盗む気らしい。・・・何て運が悪いんだろう。寄りにも拠って、ライダーが乗ってきたバイクを盗もうとするなんて。実際、僕の隣ではライダーが何時でも飛び出せるように、体制を整えていた。このままだと、確実に血の雨が降る。そう僕が考えていた時、男達の背後から誰かの声がした。

「おい！その馬鹿、デブ、チビ！人様の物盗むも何とか許されると思ってんのか？」

「だっ誰が馬鹿だ！？」

「俺はチビじゃないっス！」

「お、俺はデブだから、あ、当たってるんだなあ」

「「納得すんな！（っス！）」」

何だろこのコント？あ、ライダーも目が点に成ってる。それに、格好付けて出てきた人物 - 多分僕と殆ど変わらないと思う - も正直余り決まってるない。だって。

「・・・まあ、とにかく！このヴァイス様の目の届く所で犯行に及んだのが運の尽きだ！大人しく自首し「うわああああああん！！」ん？ラグナ起こしちゃったか？悪い悪い！そーら高い高い！」

「きゃっ！きゃっ！」

小さい子供を、抱っこした状態なんだから。

「ふっ、ふざけんな！？お前らやつちまえ！」

「おうッス！」

「や、やるんだなあ！」

子供をあやす男 - ヴァイスって言ってたけど、もしかしてヴァイス・グランセニック？ - に向かって行く男達。だがかし。

「よつと」

「へぐつ!？」

「ほいつと」

「っス!？」

「よつこらしょつと」

「だ、だなあ!？」

男達には目も暮れず、子供をあやししながら、意図も簡単に伸してしまった。横に居たライダーも「ほう、やりますね」と呟いた位鮮やかな手並みだった。

「覚えてやがれ〜〜!!」

「月の無い夜は気才付けるっスよ〜〜!」

「御免なんだなあ〜〜。もうしないんだなあ〜〜」

捨て台詞を残して男達は、逃げていった。・・・太つてた人は、反省してた見たいだね。まあ、とにかくお礼を言わないと。

「あの、ありぐわん！！」「おお！？ラグナ泣くなよ！？ほら、ラグナの好きなネコアルク人形だぞ」

「ふう、何とか泣き止んだか……。ん？兄ちゃん、俺に何か用かい？」

・・・何か凄く疲れた。とにかく、事情を説明する。

「成る程な、そのバイク姉ちゃんの物だったのか」

「はい、お陰で助かりました」

「良いつて事よ！偶々通り掛かったただけだしな」

気さくに答える彼の名を聞いたら、やっぱりヴァイス・グランセニックだった。それで、かれに抱っこされている子が、妹のラグナ・グランセニック、現在ニオだそうだ。

「と、やば！？そろそろ家帰んねえと」

「何か、用事でも」

「いや、もう直ぐラグナの好きな子供番組が始まる時間なんだよ」

そんな！と、ヴァイスは妹と共に帰っていった。

「妹思いの良いお兄さんでしたね」

「そうだね」

そう言っ て僕らは笑う。 本当に仲の良い兄妹だと思う。

「じゃあ、僕らも帰ろうか？」

「はい」

帰ったら、お土産のケーキを皆で食べながら、今日の事を話そう。  
僕はそう決めていた。

## 第九話 僕と彼女と兄妹と（後書き）

ラグナの年齢は、第三期で12歳ですからこれで合ってる筈。

**幕間五 在る執務官の不幸前編（前書き）**

少し長く成りそうなので分けます。  
続きは後日。

## 幕間五 在る執務官の不幸前編

深夜のクラナガン、その片隅に有る一軒のバー、そのカウンター席に一人の女の姿が有った。烏の濡れ羽の様な艶やかな黒髪、憂いを秘めたその瞳は店に来ていた男達の視線を集めるには十分で有った。そんな女にバーテンが声を掛ける。女の目の前に、有る物を置きながら。

「あちらのお客様からです」

バーテンの指し示す方向に居たのは、神父服を見に纏った男だった。男は女に軽く会釈し、女もそれに返す。その後、男から送られた物を改めて確認して。

「って、何で麻婆何だ〜〜!!」

叫んだ、叫んでそれを男、詰まり『コトミネ』に向かって投げつける。コトミネは、それを事も無げに空中でキャッチし、蓮華を使い食べ始める。

「ハフハフ……。何だ？麻婆は嫌いかな？」

「そう言う問題じゃ無いでしょう!?大体このタイミングで何故麻婆!?!いや、それはともかく、何で極普通にカウンター席に座って



るんですか！？貴方の役目はバックアップでしょう？ああもう、こんな格好までして、犯人を待ち構えてる『僕』が馬鹿みたいだ・・・」

女、いや時空管理局執務官『クロノ・ハラオウン』は、そう言っ  
て己の不幸を嘆く。無論原因は判っている。今も、一心不乱に麻婆  
を食すコトミネ神父と、そしてもう一人。

「まあまあ、そんなに怒らないで。折角可愛い格好してるんだから」

この目の前でバーテンの格好をした男、名を『キリツグ・エミヤ・  
アインツベルン』と言う。コトミネの経営する孤児院の出身者で、  
現在フリーの魔導師として活躍中の男で有り、クロノにこんな格好  
をさせた張本人で有る。

「・・・言って置きますけど、貴方にも言いたい事は、山ほど有り  
ますから」

若干据わった目でキリツグを睨む。如何やら色々限界らしい。何  
故彼らがこのような、出来の悪いコントの様な事をしているのか？  
事の始まりは、数時間前に遡る。

「・・・久しぶりだなキリツグ。合いも変わらず不快な面構えだ」

「・・・お久しぶりですコトミネ神父。相変わらずのモジヤ髪が鬱陶しいですね。本当に死ねば良いのに」

「クツクツクツ・・・！」

「フツフツフツ・・・！」

出会い頭に不穏な空気を醸し出す二人に、クロノは、不安を隠せなかった。

（本当に大丈夫なのかこの二人？）

クロノの予感当たっていた。何しろこの二人、キリツグが、孤児院に居た頃から犬猿の仲だった。それこそ、もしキレイやアイリ

・アイリスフィール・が居なければ、何時殺し合いに発展するか？  
と思わせる程で有った。そんな二人が再開してこの程度済んでいる  
のは、寧ろ僥倖と言わざるを得ない。

「・・・まあ良い、貴様との決着は何れつけるとして、対象は如何  
なっている？」

「・・・仕方ない、今回は見逃してやる。ああ、ターゲットの事な  
ら把握している」

「・・・行き成り話を進めないで欲しいんだが？」

そう言うクロノを無視して、二人は話を続ける。キリツグが調べ  
た情報に寄ると、犯人の一人であるサーヴァントは、犯行翌日から  
毎晩このバーに顔を出しているらしい。それを聞いてクロノは頭を  
抱える、少しは逃げ隠れ位しる仮にも犯罪者何だから。

「ふむ、それで？仕込みは済んでいるのだろうか？」

「ああ、何時でもボタン一つで店ごと爆破でk「一寸待った!？」  
如何かしたのかい？執務官君？」

思いつきり物騒な話を始めたキリツグに思わず突っ込む。

「爆破って、思いつきり質量兵器じゃ無いですか!？」

「ああ、それなら大丈夫」

「何が大丈夫ですか？」

キリツグは、朗らかに笑いサムズアップしながらこう答える。

「証拠何て残さないから、ばれなければ犯罪じゃ無いんだよ？」

「・・・貴方、僕の肩書き忘れてません」

目の前に居るのが、執務官だと云う事を忘れたかの様に、極当たり前の様に犯罪の話をするキリツグに、クロノは、自分の胃が痛く成って来たのを感じた。

「とにかく！爆破は駄目です！！唯でさえ、陸に黙ってこんな事してるのに、余計に問題を増やして如何するんですか！？」

「・・・仕方ない、諦めるとするよ。・・・爆破はね（ぼそっ）」

「分かってくれればって、何か言いました？」

「うっん、何も」

誤魔化すキリツグを訝しげに眺めながらも、クロノは話の続きを促す。

「要するに、客として店に張り込んで居れば、何れ対象と接触出切ると云う訳か・・・」

「そう言うこと。ただし、一つ問題が有る」

それまでのふざけた態度を一変させ、真剣な顔で語るキリツグに、クロノとコトミネも真剣な顔で耳を貸す。

「あの店は、結構高級な店でね。僕や神父見たいな、見るからに怪しい人物は一寸入り辛い」

「む、成らば如何するのだ？」

「・・・何か嫌な予感がする」

不吉な気配を感じたクロノは、二人から距離を取ろうとするが、あっさりと捕まってしまう。そしてキリツグから告げられた作戦を聞いて、身の危険を感じたのか、全力で抵抗する。

「嫌だっ！何で僕が女装しなくちゃいけないんだっ！？」

「それは、あれだよ」

「うむ、これはあれだ」

「「その方が面白いからだよ（では無いか？）」「」

「ふ、ざ、け、る、な〜！？って何撮影してるんですか！？」

ノリノリでクロノを女装させる二人。やれ、黒髪ロングが大人の雰囲気を出して良いとか。やれ、背の低さはヒールの高い靴を履けば誤魔化せるだの。やれ、パットを入れるだの。クロノを玩具にして二人は遊んでいた。・・・流石にパットは拒否したようだ。そうして完成した、『クロノちゃん』を『記念だから！』と撮影するキリツグ。コトミネは満足そうに何時もの笑いを浮べていた。

「ううう、こんな姿母さん達に見せられない・・・」

「クツクツクツ！似合っているぞ」

「うん、最高に可愛いよ！」

一仕事やり終えた様な顔で、サムズアップする二人に、クロノは真剣に殺意を覚える。しかし、クロノの不幸は終わらない。何しろ、これから店の客として、犯人が来るまで張り込みをしなければいけないのだ。果たしてクロノは、無事に犯人を逮捕出切るのか？

「さて、この映像を母親にも送って置こう」

「じゃあ、僕は孤児院の皆に送ろうかな？」

「……………無理かも知れない。」

**幕間五 在る執務官の不幸中篇（前書き）**

終らなかった（泣）次で、必ず終らせます。  
後、前回と違いシリアス？です。



## 幕間五 在る執務官の不幸中篇

張り込みを始めて数時間後、遂にその時は訪れた。相変わらず女装して、カウンター席に座るクロノの視界に金髪赤眼の男が映った。クロノの体に緊張が走る。何しろ相手は、聖王教会所属の騎士達を無傷で殲滅した程の使い手だ。

（・・・落ち着け、まだ早い）

まだ仕掛けるには早すぎる。クロノは、そう判断した。まずは落ち着いて相手の行動を観察しなければ。

「雑種、何時ものだ」

「畏まりました」

バーテンに扮したキリツグが、男即ちアーチャーからの注文を受けてカクテルを用意する。それを視界の端に映しながら、クロノは、今回の作戦を確認する。

（要点は三つ、不意を付く事。相手の得意な戦法を封じる事。そして、周りの被害を最小限にする事）

一つ目は簡単だ、単純にアーチャーが酔うのを待てば良い。無論サーヴァントが酔うのか？と云う懸念事項は有るが。二つ目も問題無い。その為に店内で仕掛ける予定なのだ。聞いた限りアーチャーは、背後に無数の武器を浮べて射出するらしい。その一つ一つが非常に危険な代物だが、室内で何も考えずに使えば、自分にも危険な為馬鹿な真似は出来まい。

（問題は三つ目、店内で仕掛ける為に如何したって被害がでる。物が壊れる位はこの際構わない。幸いオーナーとは話が付いている。壊れた物の弁償は聖王教会が持つからそれも気にしないで良い。）

だがしかし、派手に立ち回れば、その分周囲に騒音を待ち散らす事に成る。そう成れば、当然陸の局員が駆け付けて来るそれは不味い、何しろ今回のこれは陸に無断で行っている事なのだから。

（出来れば、最初の不意打ちで決めたい所だ。旨くバインドが決まればそれで良い。万が一失敗しても、キリツグさんとコトミネ神父が追撃する予定だから大丈夫だろう）

とにかく、今はタイミングを計らねば。クロノはそう考えながらその時を待つ。

(・・・何か仕掛けているな)

アーチャーは店内に入って直ぐに違和感に気付いた。

(カウンターに座っている女、いや、女装した男か？それに、バーテンも何時もの雑種と違うな。後は、店に入る前に感じた視線。我<sup>オレ</sup>を捕らえに来た管理局の狗と云った所か・・・)

面白い、アーチャーはそう思った。高々三人で自分を捕らえようとする、その蛮勇は、逆にアーチャーを愉快的気分にするには十分だった。

(ふん、雑種が分不相応な事に挑むか。成らば王たる我<sup>オレ</sup>がもっと面白くしてやろう)

良い事を思い付いたとばかりに、アーチャーは笑う。何時もの様に注文を済ませ、出来たカクテルを手に持ち立ち上がる。向かうは、先程からこちらに意識を向けている、女装<sup>道化者</sup>した男の所だ。

（さあ、如何する狗？）

心底愉快で堪らないと、アーチャーはより笑みを深くする。事態が動くまで後数分。

（こつちに来た！？まさか、気付かれたか？）

内心の動揺を抑えて、クロノは、上着の袖に隠して置いた・何時でも取り出せる様にする為・カード、詰まり自身のデバイスであるS2Uを取り出す。視線をキリツグに向けると、キリツグも懷に手を入れていた。それを確認すると、クロノは、店外で待機しているコトミネに念話を飛ばす。

【コトミネ神父、対象が動きました。バックアップは頼みます】

【任せて置くが良い】

アーチャーは、悠然と歩いて来る。

（後、三步で間合いだ）

二歩。

（一步、ここだ！）

クロノは、持っていたグラスをアーチャーに向かって投げる。まだ、中身の残っていたそれが、アーチャーの気を一瞬だけ逸らす。

「むっ!？」

直ぐ様、セツトアップを済ませバインドを使用する。それに合わせる様に、キリツグも自身のデバイス『コンデンター』を、アーチャーの後頭部に押し当てる。

「動くな!言つて置くが、僕は引き金を引くのに躊躇は無いぞ?」

以外に、あっさり捕まったアーチャーに、クロノが拍子抜けして  
いると、突然、アーチャーが笑い出した。

「くつくくつ！はっはっはっはっ……！！」

「何が可笑しい？」

キリツグの疑問に、アーチャーが答える。

「何、この程度で我を拘束出来たと思っ<sup>オレ</sup>ている、貴様等の浅はかさ  
が余りにも可笑しくてなあ！」

そう言ったアーチャーの掌から、黒い何かが零れ落ちた。それが、  
床に触れると同時に閃光を放つ。

「いかん！？二人共離れる！」

バックアップの為に店内に侵入した、コトミネの叫びも空しく、  
アーチャーを中心とした空間が爆発した。

「クッ！？何だ今のは！？」

ギリギリプロテクションが間に合った、クロノは、目の前の光景に愕然とする。そこに居たのは、黄金の鎧を身に纏ったアーチャーの姿だった。

「さて、覚悟は良いか狗共？」

クロノの長い夜はまだ明けそうに無かった。

## 幕間五 在る執務官の不幸中篇（後書き）

金ぴかが格好付けてますが、大した事してません。

幾等慢心王でも、事前に判ってたら、何か用意するよなって事です。それと、クロノは女装したままです。



## 幕間五 在る執務官の不幸後編（前書き）

スイマセン、遅れました。

実の所風邪を引いてしまい、二日前までPCに殆ど触れませんでした。

現在も体調は余り良くは有りません。

その為、文章が所々おかしいかも知れません。

出来たらご指摘頂けると嬉しいです。

## 幕間五 在る執務官の不幸後編

それは、アーチャーがこの世界に現れてから暫く経ったある日の事だった。その日アーチャーが居たのは、何処かの研究施設。その一室で研究に打ち込む白衣の男とその助手らしき女が居た。アーチャーは、男の研究その物には興味が無いが、男がデスクに置いていた『有る物』には興味が有った様だ。ソレを手を持ち白衣の男に見せ尋ねる。

「オイ雑種、これは何だ？」

「アーチャー！貴方、誰に向かってその様な口を利いてるか判つてるの！？」

「まあまあ、私は気にしてないよ」

女がアーチャーを諷めるが、肝心の白衣の男は気にしてない様で、アーチャーの質問に答える。

「それかい？それは確か、ええつと・・・、そうだ、スポンサー殿から送られた研究用の資料だった筈だよ。まあ、興味が無いから放置して置いた物だけだね」

如何やらこの男も、大概自分勝手な性格な様だ。肩を竦める男、

本来のアーチャーの性格を考えれば、『王が尋ねているのに知らぬだと？そうか、そんなに死にたいか？』とでも言いそうだが、不思議と白衣の男に対して、アーチャーは肝要だった。

「・・・詰まり、貴様もこれが何か判らんと？」

「残念ながら、ね。恐らくは、それなりに価値は有るんだろうけどね」

「ふむ、成らばこれは我が鑑定<sup>オレ</sup>してやろう」

そう言つて、アーチャーはソレ・石炭の様な黒い塊・を自身の背後に放り投げる。すると、空間が揺らぎソレは空間に吸い込まれる様に消失した。

「へえ、それも君の宝具の能力かい？」

「そんな所だ。・・・ふむ、やはりこれは『原典』の様だな」

「『原典』？」

この場合の原典とは即ち、世に出回る前の姿の事をさす。因みに、アーチャーの持つ宝具『<sup>ゲート・オブ・バビロン</sup>王の財宝』に収められているのは総て原典だ。暫くして、『<sup>ゲート・オブ・バビロン</sup>王の財宝』から、銀色に輝く弾丸の様な物が出て来た。

「これは、もしかカートリッジ？」

白衣の男が、ソレを拾い上げて確認するが、ソレは間違い無くベ  
ルカ式デバイス等に用いられるカートリッジで有った。

「鑑定の結果だが、あの石の様な物は、周囲の魔力を取り込む性質  
が有るらしい。おまけに、一定量以上の魔力を吸収すると、爆発す  
る様だ。如何やら当時の雑種共は、これを戦争時に手榴弾代わりに  
使っていた様だな」

「それを後の人間が、逆に貯めた魔力を自分に流し込む様にしたの  
が、カートリッジシステムと言う事かい？」

白衣の男は納得した。何故、スポンサーがアレを送って来たのか  
を。その性質を利用し、上手く扱う事が出来れば如何なるか？

（それこそ、人工的なリンカーコアが完成する。成る程、確かにそ  
れは素晴らしい・・・）

そう考える男の目は冷め切っていた。自身の研究を愚弄された様  
な気がしたからだ。

（だが、ご老人方の誤算は、ここにアーチャーが居た事だ。）

アーチャーの性格を考えれば、一度自分の物にした物を返しはしないだろう。そして、それを諫められる者も居ない。アーチャーは、人の決めた法には従わない。アーチャーが従う法は唯一つ、己が決めた法だけだ。

「如何した雑種？随分と嬉しそうだな？」

「何でも無いさ」

再び肩を竦める男に、アーチャーは一言「そうか」と言ってそれ以上何も尋ね様とはしなかった。

惨憺たる有様の店内。自身の所有する『カートリッジの原典』を

使い、この惨状を引き起こしたアーチャーは、己を取り囲む三人に余裕を見せ付ける。

「如何した？掛かってこんのか？」

アーチャーの挑発を無視して、クロノ達は、念話で作戦会議を行っていた。

（如何する？僕としては撤退を進言したい所だけど）

（同感だが、逃がしてはくれんだろう）

（なら、やるしか有りませんね！）

（それで、具体的には？）

作戦が決まり、三人は其々に行動を開始する。キリツグはアーチャーの右側面に、コトミネは正面から、クロノはその場で詠唱に入る。

「じゃあ、先ずはこれから！」

《シュートバレット》

コンデンターの銃口から放たれた、灰色の魔力弾は狙い変わらず、アーチャーに直撃する。その結果を確認する事無く、コトミネは接近する。

「ふん、この程度！」

直撃した筈の魔力弾は、しかし、アーチャーの持つ対魔力スキルの所為で、ダメージを与えるに足り得る物では無かった。だが、コトミネがアーチャーに肉薄する時間を稼ぐには十二分過ぎる。接近に成功したコトミネは、アーチャーの鎧に覆われた腹部に拳を合わせる。そして。

「嘖！」

震脚！床を踏み抜かんばかりのそれに合わせて拳を前に突き出す。

「破！」

コトミネ渾身の寸頸は、確かにアーチャーに命中した。それも魔力で身体能力が強化された上で、だ。

「クッ！？この程度で」

王の財宝から剣を取り出し、コトミネに振るう。コトミネは、それを身を僅かに逸らすだけで回避し、尚も追撃に移る。

「ええい！？鬱陶しい奴め！」

アーチャーは、距離を取ろうとするが、その都度キリツグからの射撃で妨害される。

（今の所は順調か・・・）

コトミネとキリツグの奮戦の裏で、魔法準備中のクロノはそう考える。その頭上には多数の魔力刃が浮かんでいた。

（二人が詠唱時間を稼ぎ、僕が最大威力の魔法を放つ）

更に云えば、それで倒せなくても、直ぐに二人が追撃する。今現在の戦力を考えれば間違い無い作戦だ。

（なのに何故、こんなに不安を感じる？いや、考えるな。）



クロノは、やおら感じた不安を押し隠す。

既に、アーチャーは、この戦いに飽きが来ていた。それも仕方が無いのかもしれない。別に、今対峙している三人が弱い訳ではない。寧ろ、アーチャーが、これまで相手して来た者達の中では、上位に属するだろう。だがしかし、相手が人間で有る限り、アーチャーは、全力を出す事が出来ない。故に、この闘争を愉しめない。

（チツ！令呪の縛りがこれ程厄介とはな。あの偽者<sup>フェイク</sup>めは、何れ後腐れ無く消してくれる）

この身を縛る、マスターからの令呪。それは、『人間を殺すな』と云う物だった。下らないとアーチャーは吐き捨てる。闘争の場に置いて、これ程理不尽な命令は無い。この礼呪の所為でアーチャーは、人を殺す可能性の有る総ての行動に制限が掛かった。その為、アーチャーは、自分の宝具を全力で扱えない。例え余波でも、殺しかねないからだ。何故、アーチャーのマスターがその様な事に、令

呪を使用したのか、それはアーチャーにも判らない。唯一つ判っている事は、アーチャーに取ってマスターは既に、殺害対象でしかないと言う事だ。

（この様な雑種共との戦闘など、早々に切り上げるとしよう）

アーチャーはそう決めると、自身に纏わり付くコトミネに視線を向ける。

「そろそろ離れる雑種が！」

剣を振るう、当然それはかわされる。だがしかし、アーチャーはコトミネのかわした方に蹴りを放つ。初めから、避けられる事を前提にした攻撃。

「ぐうう！？」

それはコトミネの腹部に当たり、僅かの間コトミネの動きを押し止める。アーチャーは、追撃を掛け様と、自ら間合いを詰める。それを阻止しようとキリツグが動くが・・・。

「させない！」と、思ったであろう？」「何！？」

「<sup>オレ</sup>私の狙いは、貴様だ狗！『天の鎖よ』！」

「な、何だこれは！？」

王の財宝から、飛び出した鎖がキリツグを拘束する。本来は、神性を持つ者に以外には唯の頑丈な鎖だが、この場ではそれで十分だった。身動きを取れないキリツグを無視し、既に、体制を整えたコトミネと再び向かい合う。

「次は貴様だ雑種！先の拳打、まさか蹴り一つで済むとは思ってはおるまい？」

剣を収納し、真紅の槍を取り出す。それを手に、コトミネに近づく。しかしその時、クロノが叫ぶ。

「コトミネ神父下がつて下さい！食らえアーチャー！ステインガーブレイド・エクスキューションシフト！」

クロノの頭上に出現していた、百を超える魔力刃がアーチャーに向かって殺到する。やがて、その姿は粉塵に隠れて見えなくなってしまう。

「はあ・・・、はあ・・・、これで、決まってくれば・・・」

「助かった、礼を言わせてくれ」

こつちも何とかしてくれ！と、鎖でグルグル巻きにされたキリツグが喚く。それに、苦笑しながら応じ様とした。その時。

・ 起きろ、『エア』 ・

聞こえて来た声に、クロノ達は戦慄する。砂塵が収まるとそこには、無傷でアーチャーが立っていた。

「ふん、今のは少々驚いたぞ雑種。だがしかし、我<sup>オレ</sup>を倒すには役不足にも程が有る」

右手に持つソレを、クロノ達に突きつける。ソレは奇妙な『剣』だった。少なくともこの場に居る者の中に、あの様な形状の『剣』を見た事の有る者は居ない。柄の上に円錐を三つ重ねた様なソレは、しかし、間違い無く『剣』だった。

「我<sup>オレ</sup>を倒したいのなら、せめてこれ位はしてもらわんな？」

その言葉に、ソレは呼応するかのように唸りを上げる。三つの円錐は其々回転し周囲に莫大な魔力が溢れ出す。アーチャーはソレを。

「いざ仰げ  
エヌマ・エリシュ  
天地乖離す開闢の星を！」

頭上に向けて解き放った。

最早言葉も無く立ち尽くすクロノ達に、アーチャーは満足そうに笑みを浮べる。それは当然かもしれない。何しろ今振るった『剣』こそ、真の意味でアーチャーが頼みを置く宝具なのだから。その威容を目にして尚向かい来る者など皆無。その威力を前にしては如何なる守りも意味を成さない。何故なら、その『剣』が切り裂くのは敵では無く、世界その物なのだから。

「漸く理解した様な雑種共」

その結果如何なつたか？答えは簡単『何も無い』

「我<sup>オレ</sup>に齒向かう事の愚かさを、な？」

全て吹き飛んだ。そう、天井所か遙か上空の雲さえも。何もかもを、初めから存在しないかの様に消してしまった。その光景は見る者の戦意を挫くには十二分に過ぎた。

「さて、まだ続けるか？」

指を鳴らし背後に複数の剣や槍が出現する。無論、令呪の所為で殺せないのだから脅し程度の意味しかない。それでも、この場合は十分だった。命を奪う事を禁じられているのなら、心を折れば良い。詰まりそう云う事だ。これで終わり、アーチャーはそう考えていた。しかし。

「……………るな」

「何か言ったか？雑種？」

「……ざけるな！」

アーチャーの誤算は、クロノ・ハラウンと云う人間を、侮っていた事だろう。

確かにクロノはアーチャーに恐怖を感じていた。だが、それが如何した？自分より圧倒的な強者との戦闘など、それこそ今更の話だ。だからこそクロノは叫ぶ、まだ終わっていないと。

「……ふざけるな！」

この程度で心が折れる程、クロノは柔ではない。恐怖に震える膝を殴りつけアーチャーを睨みつける。

「……確かにふざけているな。まだ、私達は戦える。止めも刺さずに勝者を気取るとは……。流石に浅はかでは無いかね？」

「ああ、全くだ。確かに今は少しばかり驚いたけどね」

クロノの言葉に呼応するかのように、コトミネとキリツグ 但し、まだ鎖でグルグル巻き。如何やらコトミネの所まで、転がって来た様だ が続ける。三人共戦意は微塵も衰えていなかった。それを見て取ったアーチャーは、寧ろ楽しげに告げる。

「ほう、雑種には見上げた度胸だと褒めてやろう。だが、この状況を覆す手段など有りはすまい？」

「如何だろうな？ やって見なければ判らんぞ？」

そう言つてコトミネは構える。クロノも身を沈め、何時でも飛び出せる様に備える。キリツグは鎖から逃れる為にもがいている。

「何か僕だけ格好悪く無い？」

「ん？ ああ、忘れていた。戻れ！」

アーチャーの言葉と共に天の鎖がキリツグを開放する。それに困惑するキリツグに対し。

「一人増えた所で如何と言う事も無い。寧ろ貴様らが何をするのか



「楽しみな位だ」

「・・・言ったな？後悔させてやる」

不適に笑うアーチャーの発言に、キリツグもつられて不適な笑みを浮べる。キリツグは、ポケットからタバコを取り出し啜える。ライターで火を付け紫煙を吐き出した後呟く。

「それじゃあ、再開と行きますか！」

その言葉と共に、コトミネとクロノが飛び出す。アーチャーはエアを戻し、別の剣を取り出す。コトミネとクロノは、示し合わせていたのか左右から挟撃する。床を滑るように移動したコトミネは、アーチャーの体勢を崩そうと足を狙うが、アーチャーはそれを余裕を持ってかわす。

（コイツは使う積りは無かったんだけど）

コトミネに、剣を振るおうとすれば、クロノがバインドを腕にかけ邪魔をする。長時間拘束出来なくても、一瞬だけでも止められればそれで良いと言わんばかりの行動だが、この場合は正しい選択だろう。再び間合いを詰めたコトミネは、今度はアーチャーの顎を狙い右足で蹴りを放つ。それも、身を軽く反らすだけでかわされるが、続く動作で左の足で追撃の蹴りを放つ。流石に二撃目はかわすのが間に合わず、コトミネの連環腿はアーチャーの顎を捉える。

（二人に気を取られている内に・・・）

予想以上のダメージにアーチャーの顔が歪む。それを眺めながら  
キリツグは、一発の弾丸を取り出した。

（まだ試作段階の上、サーヴァントに通じるかは未知数。それでも、  
コレを使う位しか僕に手は残されていない）

クロノはコトミネのサポートに回る。

（チャンスは一度だけ……。執務官君が攻撃した後！）

コンデンターにソレを装填し薬室を閉鎖。銃身をアーチャーへと  
向ける。

（相手が魔導師や騎士なら確実に効くが……。いや、弱気になる  
な）

「後ろがから空きだぞ！」

背後に回りこんだコトミネに拠って、前へと弾き出されるアーチ

ヤー。その先にはクロノが居た。クロノはS2Uをアーチャーの胸部に押し当てる。

## 《ブレイクインパルス》

固有振動数を割り出された、アーチャーの鎧の一部が碎ける。

「グウツァ！？雑種が調子に乗るなあああ！？」

剣でクロノを薙ぎ払う。回避が遅れたクロノはもろに受けてしまい、吹き飛ばされる。そこに、アーチャーは王の財宝ゲイト・オブ・パレロンを使い武器を射出する。怒りに任せたそれも、礼呪の所為でクロノを殺すには至らない。何とか逃れたクロノを忌々しげに睨み付けるアーチャーだったが、不意にキリツグと目が合う。

「取って置きだ！遠慮無く受け取れ！」

キリツグの狙いに気付いたアーチャーは、射線から離れようとするが、再びクロノのバインドに邪魔される。そしてキリツグは引き金を引いた。放たれた弾丸は吸い込まれる様に、クロノのブレイクインパルスで碎かれた、アーチャーの鎧の胸部に着弾する。

「がっ！？」

(・・・効いたか?)

「雑種共が我<sup>オレ</sup>をな<sup>m</sup>、なあああ・・・!??」

「アーチャーの体が透けていく!??」

キリツグが打ち込んだ弾丸、それは着弾点を中心に有る魔法を発生させた。A M F アンチ・マギリング・フィールド 魔力の結合を阻害するその魔法は本来、フィールド系に属している。その為その効果は無差別であり、通常なら範囲内の敵味方問わず影響を受ける。しかし、キリツグはこの術式を小型の弾丸に込め、相手に撃ち込む事で特定対象のみに効果を限定できないかと考えた。まだ試作品で有る為効果時間は短い、完成した暁には魔導師に対する切り札と成るであろう。それだけではない、使い魔に撃ち込んだ場合などは更に致命的な結果を生む。それは何か?

(理論通りならマスターとのリンクが切断され消滅する。サーヴァントも使い魔のハイエンド版と考えれば、マスターからの魔力供給が無ければ実体化を維持出来まい)

但し、通常の使い魔よりも消滅は遅いだろうし、スキル『単独行動』を持つサーヴァントならこの状態でも活動可能だろう。詰まりは。

(アーチャーの霊体化も一時的な物と見て良い。だが少なくとも一

矢報いる事は出来た)

直ぐに活動を再開する可能性が高い。やはり今の内に撤退するか？キリツグが思考を巡らせていると、アーチャーの声が聞こえた。

雑種と思って少々侮りすぎたか。まあ良い、中々楽しめたぞ？褒美だ今日は見逃してやろう

「負け惜しみを！」

「いや、奴は本気で言っている様だぞ？」

憤るクロノをコトミネが冷静に諭す。

「事実として僕達には、もう打つ手は残されていない。ここはお言葉に甘えておこう？」

当然だな。王で有る我の施しを要らぬなどと言う権利は貴様らには無い

「やれやれ、大したオウサマ発言だね？」

呆れるキリツグ、まだ怒り覚めやらぬクロノ、冷めた目でアーチャーの居る辺りを眺めるコトミネ。三者三様だが少なくともこの戦

いがこれで終了した事は悟っていた。

さて我はそろそろ帰るとする。五月蠅い狗共が群がってきた様だからな

「・・・！？困まれてる！？」

「成る程陸の部隊か」

「こりゃ僕らも早く逃げた方が良さそうだね？」

ではさらばだ雑種共。精々狗共に捕まらないよう逃げ回る事だな？

その言葉を最後にアーチャーはこの場を去った。クロノ達も慌ててこの場を後にする。

「何で同じ管理局員から逃げないといけないんだ～～！？」

「決まっている。我々が陸の縄張り<sup>おか</sup>で勝手な事をしたからだ」

「ま、捕まったら僕と神父はそのまま牢屋行き。執務官君は良くて懲戒免職じゃない？」

実際の所逃げ切る事には成功する。しかし作戦事態は失敗し、アーチャーの足取りもこの日を境にプツリと途切れてしまう。次に

アーチャーが姿を現すのはこれより大分先の話となる。その時対峙する事になるのは誰なのか？クロノか？コトミネか？キリツグか？それとも他の誰かなのか？それは誰にも判らない。唯一つ判っているのは次に相対した時こそ、アーチャーは全力で牙を剥くで有ろう。だが今すべき事は他に有る。

「ふふふ、執務官君の女装映像を孤児院の皆に贈ろうつと！」

「ははは、成らば私は、リンディ・ハラオウンに贈呈しよう！」

「ふ、ざ、け、る、な~~~~~!!」

「「ふざけてなどいない！大真面目だ！」」

「余計に悪いわ！」

先ずはこの大人達から黒歴史を納めた映像を奪取する事、それがクロノの優先事項で有った。如何やら、クロノの不幸はまだまだエンドレスで続くようだ。

## 幕間五 在る執務官の不幸後編（後書き）

キリツグの弾丸は『起源弾』をリリカル世界に当て嵌めたらどうなるか？をコンセプトに考えました。

正直弾丸サイズでAMFとか、某ドクターでも無理だと思いますが、自分の頭ではこれが精一杯でした。



## 第十話 もう一人の『彼女』

それは六月上旬の事だった。その日ライダーは、朝からツナギ姿でV・MAXの整備をしていた。本来、彼女の宝具であるV・MAXに定期的な整備は必要無いらしいんだけど、ライダー曰く「バイク乗り足る者、自分のバイク位整備出来なくて如何しますか？」らしい。それにしても、ライダーのツナギ姿も結構似合ってるなあ。因みに髪型はポニーテールにしてある。多分作業の邪魔に成るからだろうね。まあ、この時までは平和だったんだけど……。

それから暫くして、お昼になったのでライダーを呼びにいったんだけど、そこで僕はライダーの様子が可笑しい事に気付いた。

「如何したキレイ？私の顔に何か付いてるのか？」

「……いや。寧ろ足りないと言うか、何と言うか」

具体的に言えばライダーの頭の『癖毛』が足りない。そして異常な程に肌が白い。一体ライダーに何が起こったのか？それ以前に本当に彼女はライダーなのだろうか？雰囲気も全然違う気がするし、何より表情が何時もと比べ邪悪な感じがする。

「君は本当にライダーなの？」

「無論だ。最もキレイの良く知っている小娘とは違うがな」

「・・・如何言う意味かな？」

ライダーなのにライダーじゃ無い？ああもう、頭がこんがらがってきた。僕の混乱振りを見て愉快そうに口を吊り上げる『ライダー』  
・・・絶対性格悪いよこの人。

「判らないか？仕方が無い。愚鈍で低脳で度胸の欠片もない、駄目人間の下僕に説明してやろう」  
マスター

「そこまで言わなくても良いんじゃないかな！？」

「フツ！凶星を指されて動揺したか？安心するが良い。下僕がどれだけ愚かでも私が居るのだ、例え敵が誰であれ傷付ける事はさせん」  
マスター  
下僕は私の物だからな」

さつきからマスターの所が凄く不穏な意味に聞こえるんだけど！？

「・・・・・・・・それで？君は結局誰なのさ？」

いい加減疲れて来たので先を促す。『ライダー』は、偉そうに踏ん張り返り己が真名を名乗る。

「私はライダーのサーヴァント。真名はアルトリア。そして下僕に仕える小娘の影。そうだな、強いて言えば『ライダーオルタ』とでも呼ぶが良い。他ならぬキレイだからな、特別に許可してやる」

ライダーオルタ？ってええええ！？それってセイバーオルタのライダー版って事？何で此処に居るの？

「何故此処に居る？と言いたげだな。何簡単な事だ。小娘の癖毛に触れた愚か者が居た、唯それだけの事だ。ほれ其処に居るだろう？」

ライダーオルタの指差す方を見ると、其処には血の海に沈んだケイネスと、その横で一仕事終ったと言わんばかりに爽やかに汗を拭うソラウの姿が有った。因みにソラウの手には、赤い液体が付着した釘バット。但しこの前購入した物で無く、初めから釘状の突起が付いている『釘バット見たいな何か』だ。が握られていた。怖い、怖すぎる。この子は何処に良くのだろうか？・・・あ！良く見たら物陰でウェイバーがガタガタ震えてる。

「詰まり、ケイネスが悪いと？」

「そうだ。最も強制したのは、其処のソラウとか言う小娘だが」

「・・・ソラウ、何やってんのさ」

「まあ、何にせよ」

呆れる僕の目を覗き込みながら彼女は告げる。唇の端を吊り上げ、逃がさないと言わんばかりに。

「これから宜しく頼むぞ？<sup>マスター</sup>下僕？」

「・・・はい。ヨロシクオネガイシマス」

これが僕ともう一人の『彼女』、ライダーオルタとの出会いだった。

第十話 もう一人の『彼女』（後書き）

キレイは享年十六歳なのでホロウをプレイしてません。  
なのでライダーの癖毛を握るとオルタになる事も知らない訳です。

## 第十一話 暴走し過ぎな彼女

「ア、ア、アルトリアさんがくれたあゝゝ！！」

「おいキレイ！お前が付いて居ながら何でこんな事に成ってんだよ！？まるつきり別人じゃねえか！」

「僕に言われても……。悪いのはソラウとケイネスだし」

ライダーの豹変振りに混乱するアオイとカリヤ。いやまあ、仕方ないと思うけどな？行き成り真逆のキャラに変わってたら誰だつて驚くよ。そんな僕達の様子をライダーオルタは、興味無さそうに眺めながら。

「おいキレイ、私は空腹だ。直ぐに食事の用意をせよ」

「・・・あの、お願いだからもう少し空気読んでくれないかな？今そんな状況じゃ無いでしょ？」

「ほう、詰まり何だ？私の食事より其処の愚民の方が大事だと？」

ずっと目を細めるライダーオルタ。それだけで周囲に殺気が充満する。って、これ不味いよね！？一般人の僕でも解るほどの殺気つて明らかに殺る気だよね！？あ、アオイが気絶した。

「アオイさん！？確りしてアオイさ〜ん！」

「ふん、軟弱な奴め。さてキレイ？食事の用意をするか、それとも大地に無様な骸を晒すか。選ぶが良い」

「今すぐ用意致しますですはい」

倒れたアオイとそれを介抱するカリヤに、内心詫びながら駆け出す。流石にまだ死にたくないからね。

「不味い」

そうして用意された昼食を一言で切って捨てられた。

「不味いつて、アオイの作ったご飯の何処が不味いのさ？」

「味が薄すぎる。食べた気がせん」

そう言つてアオイの作った昼食に、大量のマヨネーズをかけ出した。それはもう山の様に。それ以前に親子丼にマヨネーズつて大丈夫だろうか？少なくとも、僕は食欲を無くしてしまった。

「これで良い、マヨネーズとケチャップこそ至高の調味料だ」

「アアハイソウデスネ」

続けてケチャップまでかけ始めたライダーオルタの方を見ない様にした。絶対体に悪いと思う。言ったら殺されそうだから言わないけど・・・。

「（もぎゅもぎゅ）うむ、やはりこの位確りした味付けでないとな」

「そんなの食べる人君だけだよ・・・」



「さて、と。始めるか」

色々台無しな昼食の後、ライダーオルタはV・MAXを弄り始めた。それもとんでもなく可笑しい方向に。

「やはり六連ホーンが王道だな。色は私に合わせて黒地に赤のラインを入れて・・・」

「・・・何してるの？」

「見て解らんか？」

「僕の目には、V・MAXを族車に改造してる様に見えるんだけど？」

「何だ、解っているでは無いか。解っている事を一々聞くな愚か者」

それでも聞きたくなるのは仕方ないと想う。こんな事して何する気何だろう？僕の疑問を他所にV・MAXの魔改造は着々と進行して行った。御免ライダー（表）僕には君の大事な相棒を守れそうに無いよ。

「ふふふ、これで良い。私が騎乗するに相応しいでたちだ。そう想わんかキレイ？」

そうこうしている内に改造は終了してしまった。そこに有ったのは紛れも無く族車だった。

「さて準備は終わった。早速武威馬都馭須V・MAXの試運転がてら、ミッドを征服するとするか」

今V・MAXの所可笑しかった気がするんだけど？それに、ミッド征服！？何物騒な事言ってるのさ？

「さあ、逝くぞキレイ！ミッドに今こそ新たな伝説を打ち立てる時だ！」

「ちょ、一寸待った！そんな事したら管理局の人に怒られるから！」

「ふっ！何を言っている？管理局が怖くて」

当然といえば当然の僕の言葉にも耳を貸さず、ライダーオルタはこう言い放つ。

「―暴走族などやっといられるか！」

「・・・何時から暴走族に成ったのさ？」

そんな僕の眩きも華麗にスルーして、ライダーオルタはV・MA  
Xに騎乗し走り出す。

「先ずは手始めにクラナガンからだ！」

「・・・もう好きにして」

本当に誰でも良いからこの人止めて下さい。

## 第十二話 暴走王と僕とネコモドキ

結局ライダーオルタを止める事は出来ず、僕は彼女に無理やりV-MAXに乗せられてクラナガンまで来てしまった。まあ、正確には転生した時見たいにライダーオルタの体に縛り付けられて何だけど。それも腰の辺りに僕の顔が密着しているという何だか良く分からない体制だ。・・・お願いだからもう少しだけ考えて欲しいと思う。一応僕だって十五歳の男何だからさ。幾等サーヴァントだからって、女の子とこんなに長時間密着しっ放しはねえ？ライダーは勿論だけど、ライダーオルタも美少女だから何て云うか緊張してしまう。

「おいキレイ、確り捕まっていると言った筈だぞ？」

「そうは言っけどさ。その、女の子にしがみ付くのは、やっぱり気恥ずかしい物が有るんだよね」

「ほっ」

僕の言葉が余程面白かったのか、ライダーオルタは肩越しにこちらを見ながら、僕に話しかけてくる。

「私が女だと何故恥ずかしいのだ？」

「いや、だからさ」

駄目だ！絶対解って言うてるよこの人。やっぱり性格悪すぎる。

「ふ、冗談だ。それにしても、キレイもやはり年頃の男子と言うわけか。」

「それ如何言う意味？」

「大した意味は無い。唯・・・む？」

「うわ！？」

突然V・MAXを停車させるライダーオルタ。一体如何したのだろうつか？縛られてる所為で身動きが取れない僕には、前方に何があるのか解らない。

「・・・・・・・・ふっ、危うく引いてしまう所だった」

「え、何が？」

「見て解らんか？」

「いや、そもそも見えないんだけど？」

「ふむ、これなら如何だ」

そう言つとライダーオルタは、V・MAXの方向を変える。そのお陰で漸くソレを確認出来た。それは良いんだけど……。

「……これ何？」

「……多分ネコだ。恐らくは……きつと……うん、ネコの筈？」

自信無さげに言うライダーオルタ。うん、気持ちは良く分かる。ソレは確かにネコの特徴を備えていた。まあ、あくまで一部だけだけど。一応二つのネコ耳も有る。目も確かにネコっぽい。しかし、それ以外が何と云うか、ネコらしく無かった。先ず普通のネコは二足歩行はしない。さらに服を着てはいない。一部のペットは着てるかも知れないけど、し、何より言葉を話す事は無い。ん？何かつい最近これと同じのを見かけたような？

「にやにやにや！危なくひき殺される所だったのにや！やいその黒いの！このアタシを何処のおネコ様だと思つているのにや！？」

「……キレイ？轢いて良いか？」

「にや！？実は助かつて無い！？」

再び車体をそのネコモドキの方へ向け、V・MAXを発進させようとするライダーオルタ。不味い表情は見えないけど明らかに怒っ

てる。でも、この場合はネコモドキの方が悪いしなあ。

「一寸待つにや黒いの！アタシを殺せば、グレートキャッツヴィレ  
ッジに住む数多の同胞が、お前に復讐するのにや！それでも良いの  
かにや？」

「・・・構わん。その程度の恨みなら慣れているからな」

「にやにや！？こえゝよこの人、本気で殺る気だよ！て言うか、ス  
ンマセンしたゝゝ！！」

慌てて土下座するネコモドキ、君の気持ちは良く分かる。今のラ  
イダーオルタに冗談は通じないからね。

「はあ、許してあげなよ。一応反省してる見たいだし」

「ふん！キレイがそう言うなら、許してやらん事も無い。だが、一  
つだけ質問に答えろ」

「解ったにや！アタシに答えられる事なら何でも答えるにや！と言  
う訳で質問プリーズ！」

「貴様は何だ？本当にネコなのか？」

ライダーオルタの質問にネコモドキは、「何だそんな事にや」  
と言ってニヤリと笑う。

「ネコはネコでも、そんなところのネコでは無いにや。グレートキヤッツヴィレッジからやって来た。その名も『ネコアルク』様だにや！」

「そうか、良く分かった。それではサヨナラだ、ネコアルクとやら」

「ちょっ！？何再び轢こうとしてるにや！？質問に答えたら助けてくれるんじゃないにや！？」

「勘違いするな。あくまで『考えてやる』だけだ」

「ぎにゃゝあ！？こゝろゝさゝれゝるゝう！」

慌てて逃げ出すネコアルク。そしてそれを追いかけるライダーオルタと僕。如何やら僕の大変な一日はまだ終らないようだ。



**第十二話 暴走王と僕とネコモドキ（後書き）**

あれ？如何してコウナッタ？

### 第十三話 管理局と僕達 + 1

逃げ回るネコアルクを追いかけ、クラナガン市街を爆走するライダールタと僕。法定速度とか交通ルールとか完全無視のその行為は、当然と言えば当然だけど管理局の人から見れば立派な犯罪行為な訳で……。

『前方のバイク止まりなさい!』

当然こうなる。要するにネコアルクを追う僕達は、同時に管理局員に追われる立場に成っていた。既に僕らを追いかける管理局員の数は、可也の人数に上っていた。・・・勿論大体は車に乗ってるけど、中には自分の足で走っている人も居る。改めて僕は、魔導師と云う人種の凄さを見せ付けられた気がする。だって、V-MAXの現在の速度は150キロを越えて、流石に全速だと周りに影響が出そうだからなのか、それとも、ネコアルクが逃げられるギリギリのラインにしているのか。はたまた、管理局の人達を馬鹿にしているのか? 多分全部何だろうな。いるのに普通に追いかけて来てる。

「如何するのさ!? このままだと捕まっちゃうよ!？」

「フツ! 言った筈だぞキレイ? 管理局が怖くて暴走族などやっつけられるか!」

「そう言う問題じゃ無～～い!？」

「にゃ!?!これはチャ～～ンス!」

僕達が、後方の管理局員達に気を取られたのをチャンスと見たか、更にスピードを上げるネコアルク。それにしても、本当にアレ生物なのかな？

『もう一度だけ警告する止まりなさい!』

「奇妙なタンDEMカッポーは後ろの連中の相手でもしてれば良いにや!」

『だから止まりなさいと言ってるでしょう!』

「ふん、ネコモドキの分際で、私から逃げられると思っているのか?」

『いい加減』

「にゃにゃにゃにゃにゃ……!」

「だから、そんな事言ってる場合じゃ……」

『人の話を聞けー!』

「「「あ、切れた」」」

これは不味い、この時だけは二人と一匹？の心は一つに成っていた。いや、だって、後方を走っていた管理局員が一齐に立ち止まり、デバイスを向けてるんだもの。

『再三の警告を無視した為、コレより実力行使を開始する！総員構え！……………撃<sup>て</sup>え！』

その号令と共に様々な色の魔力弾が、僕ら目掛けて殺到する。それに対してネコアルクは、更にスピードを上げるだけでなく、動きその物もランダムに変え狙いを付け難くさせながら逃げ続ける。一方のライダーオルタは、後ろを振り返る事も無く最小限の動きでかわして行く。それこそ背中にも目でも有る様に。と、これだけなら良いんだけど、V-MAXには僕も乗ってる訳で…………。

「ちよつ、掠った！今、掠ったつて！？」

縛られた状態で身動きの出来ない僕は、当然ながら魔力弾から身を守る事など出来る筈も無い。最も動けたとしても結果は同じだと思っけど…………。半ば諦め混じりに考えていると、行き成り視界にネコアルクが飛び込んで来た。

「諦めるのはまだ早いぜ、地味ボーイ！ここは一時休戦して協力して事に当たらないかじゃ！」

「・・・何で僕に聞くの？」

「は？何故って、そのデンジャラスガールは、アンタの彼女じゃ無いのかにや？ここは彼氏らしく彼女を説得してくれないかにや？・・・アタシが下手な事云うと速攻捨て駒にされそうだし？」

ライダーオルタが僕の彼女！？何言ってるのこのネコモドキ！？

「ほう、面白そうな話をしているな？誰が、誰の彼女だって？」

「ひぎい！？食い込んでる。食い込んでるにや！？サウザンドウィンターも吃驚のアイアンクロー！？いや本当に勘弁して下さい！何か色々出ちゃうから！？」

うん、そりゃあ怒るよね。寄りにも捌けて僕の彼女呼ばわりされるとかね？ギリギリと骨の軋む音が聞こえるほど、手加減無用のアイアンクローをネコアルクに喰らわせているライダーオルタ。よっぽど頭に來たんだね。

「・・・勘違いをするなよ。キレイは私の彼氏では無い。キレイは私の主人だ！<sup>マスター</sup>！」

下僕とかいてマスターだよな？でも流石に人様にまで言わなくても良いと思うよ？

「だがまあ、後ろの連中が鬱陶しいのも事実だ。きさまの提案に乗ってやるう」

「……………その割には、手を離す気配すらにやいんですけど？」

「私達に協力してくれるのだろうか？なら、このままで良い」

「何かスッゲー嫌な予感」

ライダーオルタは、ネコアルクを掴んだまま大きく振りかぶる。そして、ネコアルクを後方の管理局員に目掛けて投擲した。

「嫌な予感ばかり的中する、自分の直感スキルが憎い……!?」

『おわ、何か飛んできた！？ウゴゲ！？』

『隊長確りして下さい！？』

それは外れる事無く直撃した。おまけに当たったのは指揮官だったらしく、局員の間に動揺が走る。それを感じたライダーオルタもこれを好機と見て、一気に加速する。先程までネコアルクを掴んでいた左手で、目元を拭いながら。

「有難うネコモドキ。貴様の事は忘れない」

「思いつきり嘘無きだよね！？言葉も棒読みだし」

「さて、興も削がれた。帰るぞキレイ」

「もう良いです・・・」

そうしてネコアルクの尊い？犠牲のお陰で何とか逃げ延びた僕等は孤児院に戻ってきた。疲れた、本当に疲れた、部屋に戻って何も考えないで眠りたい。しかし、そうは問屋が卸さないらしい。

「漸く帰ってきたか？」

「何時まで待たせる気だにや！アタシはお腹が空いて死にそうだなや！」

何故かそこには、ネコアルクを肩に乗せた神父様が立っていた。・  
・何時帰って来たの？それ以前に、何でそんなに仲良さそうなの？

「あの、神父様？ソレは？」

ネコアルクの事を尋ねると、神父様は何時もの笑みを数段深くしてこう答えた。

「何、聞けばこの御仁に二人は世話に成ったそうじゃ無いか？お前

達の保護者として是非とも礼をしたくてな」

「それで、コットミはアタシを暫く泊めてくれる事に成ったの  
や！」

何でそうなるの？隣を見ると、ライダーオルタも同じ顔をしてい  
た。

「まあ、とにかくコソコソモヨロシク？」



### 第十三話 管理局と僕達 + 1 (後書き)

有る意味前代未聞かもしれない。

普通に、スピード違反で捕まりかけたオリ主とか。

## 第十四話 暴走終了後の彼女

「な、な、な、何ですかこれは……!?」

朝一番に響くライダーの声。口調からして元に戻ったらしい。そんな事を考えながらアオイと一緒に朝食を作る。因みに今日は和食、こう云う時位しか前世の記憶って役に立たないんだよね。何しろ僕の前世は日本人、そしてここはミッドチルダ。使用されている言語も全く違う異世界。当然ながら日本での常識がここでも常識とは限らないし、その逆もまた然り。本当に最初は苦労したなあ。

「・・・と、これで良し」

後は運ぶだけ、でもその前にライダーの様子でも見てくるかな。

「ごめんアオイ、一寸アルトリアの様子を見てくる」

「解りました。それにしても、アルトリアさん如何したんでしょうね?」

敢て昨日の事には触れず ライダーの豹変振りが余程ショックだったのだろう 首を傾げながら言うアオイ。まあ、昨日のライダーは色んな意味で凄かったから・・・。

「き、き、き、キレイ！私の、私のV・MAXが！？」

ライダーはV・MAXの前で絶賛錯乱中だった。それはそうだろう、自分の相棒と呼ぶべきバイクが、朝起きたら族車に改造されていたのだから。でもねライダー？原因は君何だよ？正確にはライダーオルタだけど。でもライダーの取り乱し様を見るに、昨日の事は憶えてないみたいだ。・・・知らない方が幸せかも知れないけど・・・。

「一体全体何が如何してこうなっただんですか！？誰が私のV・MAXをこの様な無残な姿に！？」

如何しよう？本当の事を教えるべきか、それとも真実を隠すか？  
下手な事を言ったら今のライダーは容易く激昂しそうだ。

「えつとね？ライダー落ち着いて聞いて欲しいんだ」

「これが落ち着いていられますか！？ライダーで有る私に取って、V-MAXは己の半身も同然！それを汚されたからには、犯人には然るべき報いを与えねばならないのです！」

いやだから、犯人は君なんだって！その事を伝えようと、意を決して口を開こうとした僕の耳に、場違いなほど能天気な声が聞こえて来た。

「COOL！最高だよネコちゃん！アンタオレのしる中で一番いかけたネコだよ！」

「それ程でも有るかにや！そう言うアンタもアタシ程じゃにやいけど、中々いけてるにや！それに引き換えあのワカメは・・・」

「所でさネコちゃん、一つ頼みが有るんだけど聞いてくれない？」

「『アタシを独り占めしたい！』とかは勘弁にや。アタシは世界のアイドルだからにや！」

「勿論解ってるって、そんな事しないさ！」

ライダーの怒りとか、僕の葛藤とか知った事が言わんばかりに、仲良さげに会話しているのは、ネコアルクとリュウノスケだった。朝っぱらから凄いテンションだなあ。

「で？何をすれば良いにゃ？」

「簡単さ」

ネコアルクの問いに、リュウノスケはポケットから有る物を取り出す。それは何かと云うと・・・。

「墨？これで何するにゃ？」

「これでさ、魚拓ならぬにゃん拓取らせてよ！」

「にゃ！？にゃんとアタシの想像の斜め上に行くその発想！お主出来るな」

「いやいや、ネコっちゃん程じゃ無いさ。で、取っても良いOK？」

「・・・まあ、別に死ぬわけでもないし、・・・OKにゃ！綺麗に取ってね？」

「任して！超COOLなにゃん拓にするぜ！」

和気藹々と盛り上がる二人を無言で見つめるライダー。正確には、『ネコアルク』をだけど。気のせいかな？ライダーの体から何かが噴出してる気がするんだけど？

「ふふふふ……。ミツケタ」

やばい！今ライダーがなに考えてるか手に取るように判る。朝起きたらV-MAXが族車に改造されていた 誰かがやった 身内がこんな事する訳が無い そこに来た見た事無いナマモノ？ コイツが犯人に違いない 殺！

「ライダー落ち着いて！？アレは違うから！凄く怪しいけど違うから」

「V-MAXのウラミオモイシレ」

「にゃ？そこに居るのはデンジヤラスガールと地味ボーイ？あれえ？ガールの方向か昨日と雰囲気ちがく無い？」

その問い掛けを無視し、ライダーはV-MAXの傍に置いてあったレンチを手に取る。それを二、三度振ってからネコアルクの方へ向ける。それを見たネコアルクとリュウノスケの顔が引きつる。

「……何かすごくやばげ？ネコちゃんアルトリアさんに何したの？」

「いや、サッパリ検討がつかにゃいにゃ」

「ワカラナイ、ダト？」

「皆目サッパリ全然に！・・・て言うか、寧ろ昨日はアタシが被害者だったのにや！？賠償を要求するのにや！具体的にはネコ缶で」

「ソノマエニこのレンチを馳走してヤロウ」

「ぎにやゝ！？不味いにややばいにや！て云うかこえゝよこの人。昨日より二割増しでこえゝよ！」

ゆつくりとした足取りで二人に近づくライダー。その雰囲気を感じてかジリジリと後退する二人。・・・リュウノスケは関係無い筈だけどね。いや、ネコアルクも濡れ衣何だけれど。

「と、取り合えず逃ようネコちゃん！」

「賛成にや！」

「ニガストオモウカ？」

「「逃げろゝゝ！！！」」

「ククク、己の罪を後悔しながら地獄へオチロ！」

逃げる二人と追うライダー、如何も今日も追いかけてこをしなければいけないらしい。とにかく止めないと、僕がそう考え動き出そうとした時突然ライダーの動きが止まった。

「クツ、何をするんですか!？」

「なに、客人を害そうとする不届き者に罰を与えるだけだ」

何時の間にか現れた神父様が、バインドでライダーを拘束していた。対魔力スキルの有るライダーを拘束出来るとか、あのバインドにはどれだけの魔力が込められているのだろうか？

「キレイ、そこで見ていないでアルトリアに真相を話してやれ」

「あ、はい」

この後バインドだけでなく、正座もさせられたライダーにV・M・AXを改造したのが誰なのか説明した。流石に自分が犯人だと思っ  
てはいなかったのか、話の最後の方は顔色が真っ青に成っていた。

「申し訳有りませんでした」

「いや、誤解が解けて何よりにや。アタシは怒ってにやいにや」

ライダーの謝罪に寛大な態度で臨むネコアルク。でもその体は微妙に震えていた。よっぽど怖かったんだろうな。ああそれとソラウ？その石は何？え？ライダーを座らせる？それで、上から石を？だめだめ！何処でそんな事覚えてくるのさ!？



「・・・予想道理、面白くなつて来たな」

神父様やっぱり貴方が現況か？

#### 第十四話 暴走終了後の彼女（後書き）

この話を書くまでリュウノスケの事を忘れてた（泣）  
後出てないのはマイヤとアイリだけか・・・。  
そして自分は、ソラウを如何したいのだろうか？

## 第十五話 教会騎士と僕（前書き）

一応今回から原作に突入します。

## 第十五話 教会騎士と僕

以外と言えば意外だけど、コトミネ孤児院に住み着いたネコアルクは、不思議なほど馴染んでいた。その原因は多分リュウノスケ何だと思う。何しろ、暇さえあれば何時も一緒に居る位だ。ネコアルクの何処をそんなに気に入ったのか解らないけど、そのお陰でネコアルクも大人しくしてるから良いかな？そんな感じで平穩に日々を暮らしていたんだけど・・・。

「へ？騎士カリムが僕を呼んでるって？」

「はい」

「・・・何の用だろ？」

呼び出される理由に心当たりは無い。会ったのはこの前の一度だけだし、別に心象を悪くする様な事はしてない筈だよね？

「何で呼んでるのか、ライダーは聞いてる？」

「いえ、私も何も聞いていませんから」

うーん、ライダーも知らないとなると本格的に解らないな。

「キレイ、考えても判らない物は判らないんですし、いつその事本人に尋ねたら如何でしょうか？」

「それもそうだね。別に断る理由も無いし。ライダーの立場も有るし」

つい先日のことだけど、ライダーは騎士カリム付きと成っていた。恐らく一番の理由はライダーがサーヴァントだからだと思う。何しろ騎士カリムもアサシンのマスターな訳で、当然の事ながらサーヴァントの危険性は熟知してる筈だ。だからこそ自分の目の届く所に置いて置きたかったのだと思う。勿論それだけでは無く、シスター・シャツハと懇意にしている性格も温厚 時々異常に沸点が低い時があるが なライダーを個人的に気に入ってるのも有るだろう。

「所でさ会いに行くのは良いけど、何時頃行ったら良いのかな？流石に仕事の邪魔したら悪いし」

「事前に連絡して置けば大丈夫だと思いますよ？」

ライダーの指摘に、それもそうかと納得する。

「じゃあ、明日にでも行つて見ようかな？ライダー悪いけど騎士カリムにそう伝えてくれる？」

「解りました。伝えておきます」

それにしても本当に何の用なんだろうね？

そんなこんなで次の日、騎士カリムの執務室。

「御久しぶりです、キレイさん」

「ご無沙汰してます。騎士カリム」

これで会うのは二度目だけど、やっぱり綺麗な人だな。

「あの、それで僕に何の用なんでしょうか？」

早速本題を切り出す。騎士カリムも忙しいだろうし、こつこつ事は早めに済ませた方がよいよね。

「そうですね、それではご説明します」

騎士カリムの説明によると、何でもと有る世界で、古代ベルカ関連と思われる遺跡の調査をしている、調査団の視察に騎士カリムが行かなくては行けないそう。そう云えば神父様が、グラシア家はベルカ関連遺物の回収などを行っている家系だと言ってた。でも、それと僕と何の関係が？そもそも僕は聖王教会とは余り関係無いんだけど。

「確かにキレイさんは、私共とは余り関係は御座いません。ですが、シスター・アルトリアは現在教会の所属、それも私付きの為今回の視察には動向して頂かなくてはなりません。しかし、彼女は貴方のサーヴァントです。流石にマスターを頼って置いて、他の人間と行動を共にするのは問題があります」

ああ成る程、要するに騎士カリムは、ライダーを視察に連れて行って良いか、僕に尋ねる為に呼び出したんだ。うん、何て義理堅い人何だ。サーヴァントだろうと何だろうと、部下で有るのに変わりは無いんだから、本来なら一々断りを入れる必要も無いのに。

「それで私は考えたのです。如何すれば良いかと。そんな時コトミネ神父が私に天啓を授けて下さいました」

・・・何か雲行きが怪しく成って来たな。こう云う時の神父様って碌な事言わないし。

「即ち！キレイさんも一緒に視察に同行して貰えば良いと」

「・・・何でそう言う結論に？」

いや本当に意味が解りません。お願いですから誰か説明して。

「・・・キレイ。コトミネの事ですから、恐らく退路は既に絶たれています。ここは覚悟を決めるしか無いのでは？」

「因みにコトミネ神父から、キレイさん用の神父服をお預かりしておりますよ」

ライダーの言う通り、僕に逃げ場は無いらしい。結局僕はライダーと一緒に視察に同行する事が決まってしまった。取り合えず帰ったら神父様には激甘麻婆モドキでも食べさせよう。



## 第十六話 慰問と疑問（前書き）

今回の話は漫画版のエピソードが元に成っています。

## 第十六話 慰問と疑問

第91観測指定世界、管理外世界とも距離的に近い 転移魔法を使えば移動可能と云う事 この世界に僕達は来ていた。目的は勿論聖王教会から派遣されている調査隊の慰問だ。とは言え直ぐに調査中の現場に入れる訳が無く、僕は騎士カリムと一緒に、案内役の人が来るまで世間話をして時間を潰していた。因みにライダーは、シスター・シャツハと一緒に警備状況の確認に行っている。何しろ騎士カリムは聖王教会でも重要な役割を担っている人だ。万が一の事が有ったら大変だ。・・・最もライダーとシスター・シャツハ、それに数十人のアサシンが居て、その万が一が起こるとは思えないけど・・・。

「それは良いんだけど・・・。何で管理局の人が居るの？それも大勢」

「何でもこの近くで、探索指定遺失物の稼動が確認されたそうですよ」

僕の疑問に律儀に騎士カリムが答えてくれる。それにしても探索指定遺失物？何か凄く嫌な予感がするんだけど。やっぱり原作知識をメモして置けば良かったかな？はつきり言ってもうキャラの名前位しか覚えてないし、原作の時系列何てうる覚えだ。えっと確かA'sは12月頃の筈で、今は11月だから大丈夫の筈・・・多分。まあ、それはそれとして。

「良く管理局の人が教えてくれましたね？機密とか大丈夫なんですよっか？」

その辺りを気にしてないとしたら大問題じゃないかな？

「それなら大丈夫ですよ。一応私も管理局に籍を置いてますし。それに、責任者の方より階級は上ですもの」

権力ってこう云う時便利ですよ？そう言って笑う騎士カリム。どうやらこの人も神父様の影響を受けてる見たいだ。笑顔が黒いぞ。でもそれも仕方ないかも知れない。何しろ神父様の直属の上司だし。ああ、何か頭痛くなってきた。

「それにしても、調査団が調べてる遺跡って何が有るんでしょうね？」

取り合えず話題を変えようと、調査団が調べている遺跡に付いて質問する。実際の話危険とか無いのかな？まあ、大抵の事はライダーが居るし何とか成ると思うけど。リアルに ヨー ズ先生見たいな事は簡便願いたい。いや本当に、転がる大岩とか逃げ切れる自信は無いから。

「詳しい事は責任者の方に尋ねた方が宜しいと思いますか？」

「あ、いえ。そこまで詳しく知りたい訳じゃ無いんで」

「そうですか。では私の知っている範囲でご説明致します」

騎士カリムの説明に寄ると、この遺跡は古代ベルカ時代に何らかの儀式に使われた物らしい。学術的にも価値が高いし何より、古代ベルカ式魔法の秘密に迫れるかも知れないと考えられているそうだ。古代ベルカ式魔法は現在では殆ど使える人間が居らず、希少技能<sup>レアスキル</sup>に認定されている。使える人間が少ないと云う事は、古代ベルカ式魔法の実態 正確には戦闘に使用される物以外の魔法 は余り良く分かってないと云う事だ。それだけに、今回の調査に関わる人達からは、並々ならぬ熱意が感じられる。

「因みに私も古代ベルカ式の使い手なんですよ」

そんな貴重な使い手がここに一人、騎士カリムが聖王教会で重用されるのも、その辺に理由が有るんだと思う。勿論本人の有能さも有るけど。

「お待たせしました。こちらへどうぞ」

「案内役の方もこられた様ですし、そろそろ参りましょうか？」

「はい」

そうして僕たちは、案内役の人の誘導に従って遺跡に足を踏み入れた。

「はーこれはまた・・・」

「随分と広い空間ですね」

「まだ詳しい事は判明しておりませんが、恐らくここで何らかの儀式が行われていた、と考えられます」

遺跡の内部に入った僕達は、案内役の人の説明を聞きながら遺跡内を見学していた。そうして辿り着いたのは矢鱈と広大な空間だった。

「ご覧下さい」

案内役が指し示す方向に目を向けると、明らかに『何か途方も無

く巨大な何か』が安置されていたと思われる。台座の様加工された岩だった。

「見ての通り、明らかに人の手に寄る物です。ここに有った『何か』が重要な役目を果たしていたのは間違い無いと、私共は考えております」

「それにしても、見事なまでに何も有りませんね」

「これだけ大きな台座に置いて有った物だし、そう簡単に動かせないと思うんだけど・・・」

当然と言えば当然の僕たちの疑問に、案内役は待ってました！と言わんばかりの顔で説明をしようとした。しかし。

「それはですね、・・・ん？失礼します」

そこでタイミング悪く、案内役のポケットに入っていた通信端末のコール音が鳴り響いた。

「どうした？・・・ふんふん・・・何だと！？」

「何か有ったのでしょうか？」

不安そうに僕に尋ねる騎士カリム。大丈夫だと言ってやりたいけど、状況が解らないから迂闊な事は言えない。

「解った。直ぐに避難する」

通信を終えた案内役は、僕らの方を見てこう告げた。

「地上に居た管理局の部隊が襲撃を受けて壊滅したそうです」

## 第十六話 慰問と疑問（後書き）

行き成り壊滅してる管理局ですが、漫画版で凹られてる人達です。  
次回は幕間、久しぶりの戦闘描写の予定です。



## 幕間六 剣の騎士と管理局 (前書き)

一部除いて（人数とか、時間とか）殆ど漫画版と変わらないです。

## 幕間六 剣の騎士と管理局

その剣士は突如として局員達の前に現れた。そしてこう宣言する。  
「貴様達に勝負を申し込む。私が勝てば貴様らの『』を貰う」と。

「が!？」

「くそがああア！」

一人また一人と成す術も無く倒されていく仲間達。戦闘が開始されてから僅かの内に、大半の者が打ち倒されてしまった。

「微温ぬるいな」

詰まらなさそうにそう呟く、実際に詰まらないのだろう。何しろ。

「こちらはまだ抜いてもいないぞ」

その手に携えられた剣は、鞘から抜かれる事も無く振るわれていた。お前達ではこれを抜く必要は無い。そう言っているのだ。

「ふざけるな!？」

剣士の背後に回り込んでいた局員の一人が叫びと共に魔力弾を放つ。

「ふざける、だと？」

しかしそれは、あっさりとかわされる。

「まだだ!」

「ふざけているのはそっちの方では無いのか？」

「な!速い!？」

その局員は続けて魔法を行使しようとした。しかし、瞬時に間合いを詰めてきた剣士によって阻まれる。

「不意を討つ積りならもう少し慎重にやる事だ。ましてや、叫ぶなど言語道断」

そうしてその局員の鳩尾みぞおちに鞘に収めたままの剣を叩き込む。くず折れる局員から視線を外し、剣士は次なる獲物へと狙いを定める。

「く……、貴様……一体何者だ……？」

最後の一人と成った局員が剣士に問い掛ける。無論局員も予想は出来ている。自分達が搜索している遺失物、それにこの剣士は関係している。それでも問わずには居られなかった。自分達をこうもあっさりと降した人物の情報を少しでも集める為に。だが返ってきた答えは無常にも……。

「私は貴様や、貴様の仲間の名に興味が無い。故に我が名を覚えてもらおうとも思わん」

名乗る価値すらお前達には無い。そう言われデバイスを握る手に力が籠る。それに気付かないのか、それとも気付いていて無視しているのか、剣士は言葉を続ける。

「私が欲しいのはこの戦いに貴様等と賭けたものののみ」

（負けられない！せめて一矢報いるまでは！）

「さあ・・・立ってたたかうか、敗北を認めるか。決めてもらおう」

既にボロボロの体に力を込め立ち上がる。

「おのれ・・・無頼の分際で・・・！」

局員は残りの魔力を振り絞る。それに伴い、自身の足元と右斜め後方にミッド式の魔方阵が出現する。特に後者は巨大で半径数十メートルにも及んだ。そして光と共に、魔方阵の巨大さに勝るとも劣らない巨大なシルエットが浮かび上がる。

「！？」

『赤竜召喚』召喚魔法に属するそれは、単純に威力だけで見てもAAと云う破格の魔法だ。反面操作性が劣悪で、何とか術者を攻撃しない様にするのが精一杯と来ている。それでも残された手段はこれのみ、そう判断した局員は一か八かの賭けに出た。

「！！！」

「ほう、竜召喚か・・・。漸く少しはましな物が出てきたな」

ここで漸く剣士は己の剣に手を掛ける。

「だが、一つだけ訂正しておく」

《装填》

「我が身無頼に非ず！」

そしてゆつくりと抜き放つ。それと同時に足元には、ベル力式を表す三角形の魔方陣が現れる。

「使えるべき主と、守るべき仲間を持つ」

《エクスプロージョン》

その音声と共に、刀身の付け根にあるダクト部分がスライドし、カートリッジが排出される。それだけで無く、刀身に炎が燈る。

「騎士だ」

この戦いに置いて初めて剣士は構えた。

「おおおおっ・・・！」

「

!!」

局員は赤竜と共に呐喊する。このままなら、赤竜の圧倒的質量に成す術無く、剣士が押し潰される光景が眼前に展開されるだろう。そう普通なら。だがしかし、迎え撃つ剣士はそこの手合いと大きく違う点があった。有ろう事が剣士は逃げる事無く、正面からそれを迎撃する事を選択した。

「紫電」

剣を大上段から振り被り。

「一閃!」

裂帛<sup>れっぱく</sup>の気合と共に繰り出された斬撃は、赤竜を文字通り一刀両断に切り捨てた。

「ぐ……うう……っ」

赤竜の死骸の隣で倒れ付す局員に剣士は近づく。

「では・・・約束の物頂いてゆくぞ」

「ぐはあああっ！」

（シグナムだ……。こっちは終わった。ヴィータ、ザフィーラそっちはどうだ？）

（只今現場に急行中だよっ！急いでんだからいちいち念話してくんなっ！）

（そうか、それはすまなかったな）

剣士 シグナムと云うらしい は念話の相手に謝罪する。

（対象は地上には居ない様だ。一番大きい反応の有った地点には遺跡が有る。恐らくはその中だろう）

（気をつける。私が相手をした連中とは比べ物に成らない強敵やもしれん）

（ふっ、安心しろ。例えヴィータが先走っても抑えて見せるさ）



（ああ、頼んだぞ。私も急いでそちらへ向かう、くれぐれも慎重にな）

（ああもう！二人ともあたしを何だと思ってやがんだ！）

（（聞きたいのか？））

（・・・いや、良い。とにかく！もう着くから、切るぞッ！）

そう言って一方的に念話を切られる。

「やれやれ、そう云う所が心配なのだな・・・」

苦笑しつつ、シグナムも移動を開始する。だが、シグナムは知らない。目的地には彼女の予想を遥かに超える強敵が居る事を・・・。  
そして、ここまでの遣り取りを観察していた存在が居た事を・・・。

シグナムが立ち去った後、その場に一つの影が現れる。黒一色の  
禍々しい鎧に身を包むソレは、シグナムの向かった方角を向いたま  
ま、暫くの間その場に佇んでいた。

## 幕間六 剣の騎士と管理局（後書き）

『この章の』剣の騎士は、シグナムの事です。  
黒いのはまあバレバレですね。

そう云えばPVが十万突破してるので何か記念に書こうかな？

## 第十七話 役立たずな僕

管理局の部隊が襲撃を受けて壊滅した。その報を受けて俄かに騒がしく成る調査隊の面々。それに対して騎士カリムは、落ち着いて行動する様に促す。こう云う状況でパニックに陥られると危険だからね。それと騎士カリムも気付いてるみたいだ。恐らくここに居る自分達も狙われている事を・・・。

「アサシン」

「「「ここに！」」」

騎士カリムの呼び掛けに答え、実体化するアサシン達。あ、調査隊の人達が引いてる。それも仕方が無いかな？何しろ仮面を付けた、見るからに怪しい姿をした者達、その総数六十五人。・・・うん、事情を知らなかったら、僕も調査隊の人達と同じリアクションしたと思う。なにこの不審者集団？

「半数はここに残り、調査隊の護衛と避難誘導を。残りは遺跡に向かって来るであろう襲撃犯の迎撃を」

「「「御意！」」」

そんな周囲の微妙な空気など知ったこっちゃねえ！とばかりに騎

土カリムはアサシン達に指示をだす。

「それと、外に居るシャツ八達に、急ぎこちらへ来る様にと伝えて下さい」

そうして事態は動き出す。

『慌てないで下さい！こちらの指示に従って避難して下さい！！』

そう書かれたスケッチブックを手に、調査員の間をパタパタ音を立てて走り回るメイド服の少女。初めて聖王教会に行った時に、お茶を入れてくれたアサシンの女の子だ。そう言えばあの時も一言も喋らなかったけど、もしかして言葉を話せないのかな？

『その仮面の人達は大丈夫です。凄く怪しいですけど、噛み付いたりしません！』

「・・・お主は我等を何だと思っておるんだ？」

「然り、そもそもお主も我等と同じ存在だと言うのに、自分で自分を貶めてどうする？」

スケッチブックに書かれた文章に口々に文句を言う他のアサシン達。でも実際怪しいし、調査隊の人達アサシンが近づくと明らかに怯えてるしね。アサシン達の抗議に、アサシンの女の子は、スケッチブックを捲りそこに書いてある文章を見せる。

『ごめんなさい！でも、この文章は、ご主人様が書かれた物だから私に言われても困ります』

・・・ご主人様って多分騎士カリムの事だね？何時書いたんだろ？思わず騎士カリムの方を見てしまった。そんな僕の視線に気付いた騎士カリムは唇に人差し指を当てて。

「秘密です」

・・・聞くのは止めて置こう。色々危険な気がする。それに今はそんな場合でも無い。

それから十分程経過した頃、漸くライダーとシスターシャッハが合流した。・・・余計なおまけまで付いて来たけど。

「見付けた！お前達の魔力頂くぞ！」

「キレイ下がって下さい！あの少女は危険です！」

ゲートボールのスティックの様なデバイスを持ち、赤いゴスロリ風の騎士甲冑に身を包んだ幼い少女。その目は戦意に溢れており今にも襲い掛かって来そうだ。そして、僕には少女の正体に心当たりが有った。もう良く憶えていない原作だけど、流石に中心人物の名前位は覚えてる。そう彼女はA'sに登場するロストロギア『闇の書』の主を守る『守護騎士』の一人『鉄槌の騎士ヴィータ』

「それは良いんだけど・・・いや、良くも無いんだけど」

こんな所で遭遇した事は驚いたけど、今はそれよりも一つの疑問が頭に有る。それは。

「何であんなにボロボロなのさ？」

そう、何故かヴィータは傷だらけだった。騎士甲冑の所々が破け、そこから見える素肌からは出血していた。

「アサシン達の仕業です。本当はその少女だけで無く、もう一人獣の耳を生やした男が居ましたが、そちらは今もアサシン達と交戦中です」

「それって外に居るアサシン全員って事？」

「・・・はい」

それはもうイジメじゃ無いか？外に行ったアサシンは全部で三十人近かったと思うんだけど・・・。

「何ゴチャゴチャ喋ってんだ！」

怪我の所為か、それとも僕等の今の遣り取りで無視されたと思っただのか、とにかくヴィータは自身のデバイスを手に襲い掛かってきた。狙いは、僕！？

「うわっ！？」

「させません！」



「チツ！邪魔すんな！」

咄嗟に僕の前に出たライダーが、ヴィータの一撃を受け止める。

ギリギリと鐳迫り合う互いの得物。こうして戦いは開始された。・・

・相変わらず僕は役立たずだけど。

## 第十七話 役立たずな僕（後書き）

次回は再び幕間です。

アサシン達に拠るヴィータ&ザファイーライジメに成ると思います。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1076w/>

---

騎兵な彼女と転生者な僕

2011年10月7日03時00分発行